

71
559

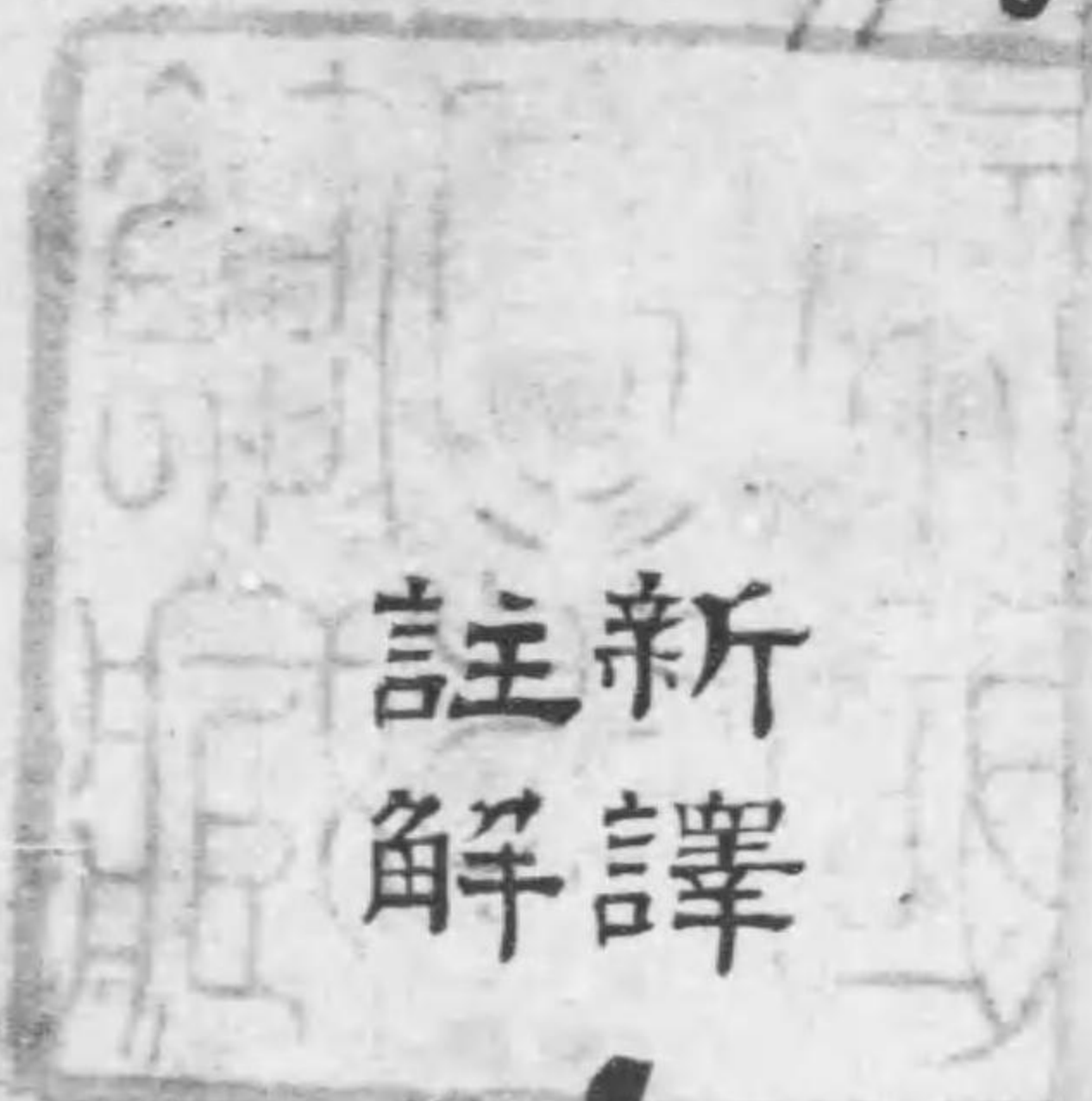
×
複写



始



71-559



新譯
註解

徒然草

大正
5.
内交

徒然草は、兼好法師の隨筆にして、その文體は、清少納言のものせる『枕草紙』を學べるよしの評あり。けだし、別に一種の格あるは言ふまでもなきことなり。兼好は、神儒佛の三道に通じ、到る所に之をあらはせり。一讀せば、容易く知らるるなり。

その言ふ所の是非、さては人物の如何は暫く措き、筆は自由自在にして、詞はみじかくして意は深く、文は簡にしておもひをば盡くす。説く所、時に或は撞着なきにあらねども、所謂漫然とくだせる筆、本書の面目も妙處も恐らくは此に存せん。

讀みて飽かざるのみならず、よく之を玩味せば、精神修養に資せずとせず世に和論語との目ある、決して謂ひなき事にあらざる也。さる故か、古來

この書の刊行多く、近來まだ註釋の書多く、一々擧げて數へがたし。余亦筆執る、固より稽古としてなり。

原文の意を害せぬ限りは、讀み易きがため、本字にかへたる所もあり。註釋は極めて精しく、且つ平易を旨とし、何人にも會得に難からざらしめたり。新譯は、文章と云ふ事よりも、原文の意を最も面白く書きなし、讀むに倦まざらしむるを主としたり。

大正丙辰三月上浣

秋 悟 識

新譯 徒 然 草

目 次

| | | | |
|---------------------------|----|------------------------|----|
| × 發端 徒然なるままに…………… | 一 | 第十段 家居のつきくしく…………… | 二六 |
| × 第一段 いでやこの世に…………… | 二 | 第十一段 かみな月の頃…………… | 二六 |
| × 第二段 古の聖の御代…………… | 九 | 第十二段 同じ心ならん人さ…………… | 二九 |
| × 第三段 よろづにいみじくさも…………… | 二 | 第十三段 ひさり燈の下に…………… | 三二 |
| × 第四段 後の世の事…………… | 二二 | 第十四段 和歌こそ猶をかき物なれ…………… | 三三 |
| × 第五段 不幸にうれひに沈める人の…………… | 三三 | 第十五段 いづくにもあれ…………… | 三七 |
| × 第六段 わが身のやんごま無からんにも…………… | 三四 | 第十六段 神樂こそ…………… | 三六 |
| ○ 第七段 あだし野の露…………… | 三六 | 第十七段 山寺にかきこもりて…………… | 三九 |
| ○ 第八段 世の人の心惑はず事…………… | 三九 | 第十八段 人はおのれをつづまやかに…………… | 三九 |
| ○ 第九段 女は髪をめたからんこそ…………… | 四〇 | 第十九段 をりふしの移りかほるこそ…………… | 四三 |
| | | 第二十段 何某さかいひし世捨人の…………… | 四〇 |
| | | 第二十一段 萬の事は…………… | 四一 |
| | | 第二十二段 何事もふるき世のみぞ…………… | 四一 |

第二十三段 衰へたる末の世さいへん……………五
 第二十四段 齋宮の……………七
 第二十五段 飛鳥川の淵瀬……………六
 第二十六段 風も吹きあへず……………六
 第二十七段 御國讓……………五
 第二十八段 諒闇の年……………七
 第二十九段 しづかに思へば……………六
 第三十段 人のなきあま……………六
 第三十一段 雪のおもしろう降りたりし朝……………七
 第三十二段 九月二十日の頃……………七
 第三十三段 今の内裏つくり去られて……………七
 第三十四段 甲香は……………七
 第三十五段 手のわるき人の……………九
 第三十六段 久しくおさづれぬ頃……………小
 第三十七段 朝夕へだてなく……………八
 第三十八段 名利につかはれて……………八
 第三十九段 ある人法然上人に……………八
 第四十段 因幡國に……………九
 第四十一段 五月五日……………一
 第四十二段 唐橋中將……………九
 第四十三段 春のくれつ方……………六
 第四十四段 あやしの竹の編戸の中より……………七
 第四十五段 公世の二位の兄人に……………七
 第四十六段 柳原の邊に……………一〇
 第四十七段 ある人清水へ参りけるに……………一〇
 第四十八段 光親卿……………一〇

第四十九段 老い來りて……………一〇
 第五十段 慶長の頃……………一〇
 第五十一段 龜山殿の御池に……………一〇
 第五十二段 仁和寺……………一〇
 第五十三段 これも仁和寺の法師……………一〇
 第五十四段 御室にいみじき兒……………一〇
 第五十五段 家の造り様は……………一〇
 第五十六段 久しく隔りて……………一〇
 第五十七段 人の語り出でたる歌物語……………一〇
 第五十八段 道心あらば……………一〇
 第五十九段 大事を思ひたたん人は……………一〇
 第六十段 眞乘院に盛親僧都さて……………一〇
 第六十一段 御産の時……………一〇
 第六十二段 延政門院……………一〇
 第六十三段 後七日の阿闍梨……………一〇
 第六十四段 車の五緒は……………一〇
 第六十五段 この頃のかぶりば……………一〇
 第六十六段 岡本關白殿……………一〇
 第六十七段 賀茂の岩本、橋本……………一〇
 第六十八段 筑紫に……………一〇
 第六十九段 書寫の上人は……………一〇
 第七十段 元應の消暑堂の御遊に……………一〇
 第七十一段 名を聞くより……………一〇
 第七十二段 いやしげなるもの……………一〇
 第七十三段 世に語り傳ふるこそ……………一〇
 第七十四段 蟻の如くに集りて……………一〇

| | | | | | |
|-------|--------------------|----|-------|--------------------|-----|
| 第七十五段 | つれづれわぶる人は…………… | 一五 | 第八十八段 | あるもの小野道風の書ける…………… | 一八六 |
| 第七十六段 | 世のおぼえ花やかなるあたり…………… | 一五 | 第八十九段 | 奥山に猶又…………… | 一八七 |
| 第七十七段 | 世の中に…………… | 一六 | 第九十段 | 大納言法印の召使ひし乙總丸…………… | 一八九 |
| 第七十八段 | 今やうの事…………… | 一六 | 第九十一段 | 赤舌日といふこと…………… | 一九〇 |
| 第七十九段 | 何ごとも…………… | 一六 | 第九十二段 | ある人弓射る事をならふに…………… | 一九一 |
| 第八十段 | 人ごまに…………… | 一七 | 第九十三段 | 牛を賣るものあり…………… | 一九四 |
| 第八十一段 | 屏風障子ごもの繪も…………… | 一七 | 第九十四段 | 常磐井の相國…………… | 一九七 |
| 第八十二段 | うすものの表紙は…………… | 一七 | 第九十五段 | 箱のくりかたに…………… | 一九九 |
| 第八十三段 | 竹林院入道左大臣殿…………… | 一八 | 第九十六段 | めなもみさいふ草あり…………… | 一九九 |
| 第八十四段 | 法顯三藏の天竺にわたりて…………… | 一七 | 第九十七段 | そのものにつきて…………… | 二〇〇 |
| 第八十五段 | 人の心すなほならねば…………… | 一七 | 第九十八段 | 尊き聖の言ひ置ける事…………… | 二〇二 |
| 第八十六段 | 惟繼中納言は…………… | 一八 | 第九十九段 | 堀川相國は…………… | 二〇三 |
| 第八十七段 | 下部に酒飲まするごまは…………… | 一八 | 第 百 段 | 久我相國は…………… | 二〇五 |

| | | | | | |
|-------|-------------------|-----|-------|-------------------|-----|
| 第百一段 | ある人…………… | 二〇五 | 第百十四段 | 今出川のおほい殿…………… | 二二三 |
| 第百二段 | 尹大納言光忠入道…………… | 二〇七 | 第百十五段 | 宿河原さいふ所にて…………… | 二三四 |
| 第百三段 | 大覺寺殿にて…………… | 二〇八 | 第百十六段 | 寺院の號…………… | 二三八 |
| 第百四段 | 荒れたる宿の人めなきに…………… | 二一〇 | 第百十七段 | 友にするにわるきもの…………… | 二三九 |
| 第百五段 | 北の屋かげに…………… | 二一三 | 第百十八段 | 鯉のあつもの食ひたる日は…………… | 二四〇 |
| 第百六段 | 高野の證空上人…………… | 二一五 | 第百十九段 | 鎌倉の海に…………… | 二四二 |
| 第百七段 | 女のものいひかけたる返事…………… | 二一七 | 第百二十段 | 唐の物は…………… | 二四三 |
| 第百八段 | 寸陰を惜む人なし…………… | 二二一 | 第百二十一 | 段 養ひ飼ふものには…………… | 二四五 |
| 第百九段 | 高名の木のぼりさいひし男…………… | 二二五 | 第百二十二 | 段 人の才能は…………… | 二四七 |
| 第百十段 | 雙六の上手さいひし人に…………… | 二二七 | 第百二十三 | 段 無益のごまをなして…………… | 二五〇 |
| 第百十一段 | 圍碁雙六好みて…………… | 二二八 | 第百二十四 | 段 是法々師は…………… | 二五一 |
| 第百十二段 | 明日は遠國へ…………… | 二三九 | 第百二十五 | 段 人におくれて…………… | 二五二 |
| 第百十三段 | 四十にもあまりぬる人の…………… | 二三二 | 第百二十六 | 段 ばくちのまげ極りて…………… | 二五四 |

| | | | | | |
|-----------|------------------|-----|----------|-----------------|-----|
| 第二百二十七段 | あらためて…………… | 三五 | 第四百十段 | 身死して…………… | 二九 |
| 第二百二十八段 | 雅房大納言は…………… | 三五 | 第四百十一段 | 悲田院の堯蓮上人…………… | 二九七 |
| ● 第二百二十九段 | 顔回は…………… | 三五八 | 第四百十二段 | 心なしと見ゆるものも…………… | 三〇〇 |
| ● 第三百十段 | ものに争はず…………… | 三六一 | 第四百十三段 | 人の終焉のありさまの…………… | 三〇三 |
| ● 第三百十一段 | 贅しきものは…………… | 三六四 | 第四百十四段 | 榊尾の上人…………… | 三〇五 |
| ● 第三百十二段 | 鳥羽のつくり道は…………… | 三六五 | 第四百十五段 | 御隨身秦重朝…………… | 三〇六 |
| ● 第三百十三段 | 夜のおまごは…………… | 三六六 | 第四百十六段 | 明雲座主…………… | 三〇八 |
| ● 第三百十四段 | 高倉院の法華堂の三昧僧…………… | 三六七 | 第四百十七段 | 灸治…………… | 三〇九 |
| ● 第三百十五段 | 資季大納言入道…………… | 三七二 | 第四百十八段 | 四十以後の人…………… | 三〇九 |
| ● 第三百十六段 | 醫師あつしげ…………… | 三七五 | 第四百十九段 | 鹿茸を鼻に…………… | 三〇〇 |
| ● 第三百十七段 | 花はさかりに…………… | 三七七 | ● 第五百十段 | 龍をつかんとする人…………… | 三〇〇 |
| ● 第三百十八段 | 祭過ぎぬれば…………… | 三八九 | ● 第五百十一段 | ある人のいはく…………… | 三〇二 |
| ● 第三百十九段 | 家にありたき木は…………… | 三九 | ● 第五百十二段 | 西大寺の靜然上人…………… | 三〇二 |

| | | | | | |
|----------|-----------------|-----|-----------|------------------|-----|
| ● 第五百十三段 | 負兼大納言入道…………… | 三五 | ● 第六百六十六段 | 人間の營みあへるわざ…………… | 三三二 |
| ● 第五百十四段 | この人…………… | 三六 | ● 第六百六十七段 | 二道にたづさはる人…………… | 三三三 |
| ● 第五百十五段 | 世に從はん人は…………… | 三八 | ● 第六百六十八段 | 年老いたる人の…………… | 三三五 |
| ● 第五百十六段 | 大臣の大饗…………… | 三三二 | ● 第六百六十九段 | 何事の式といふ事は…………… | 三三七 |
| ● 第五百十七段 | 筆をさればもの書かれ…………… | 三三三 | ● 第七十段 | さしたる事なくて…………… | 三三八 |
| ● 第五百十八段 | 盃の底を棄つるこまは…………… | 三三四 | ● 第七十一段 | 貝をおほふ人の…………… | 三三九 |
| ● 第五百十九段 | みなむすびさいふは…………… | 三三五 | ● 第七十二段 | 若き時は…………… | 三四 |
| ● 第六十段 | 門に額かくるを…………… | 三三六 | ● 第七十三段 | 小野の小町がこま…………… | 三四六 |
| ● 第六十一段 | 花のさかりは…………… | 三三七 | ● 第七十四段 | 小鷹によき犬…………… | 三四七 |
| ● 第六十二段 | 遍照寺の承仕法師…………… | 三三八 | ● 第七十五段 | 世には心得ぬ事の多き也…………… | 三四八 |
| ● 第六十三段 | 太衝の太の字…………… | 三三〇 | ● 第七十六段 | 黒戸は小松の御門…………… | 三五八 |
| ● 第六十四段 | 世の人あひ逢ふ時…………… | 三三一 | ● 第七十七段 | 鎌倉中書王にて…………… | 三五九 |
| ● 第六十五段 | あづまの人の…………… | 三三一 | ● 第七十八段 | ある所の侍ごも…………… | 三六一 |

第七十九段 入宋の沙門道眼上人……………三三
 第八十段 左義長は……………三四
 第八十一段 ふれくこゆき……………三五
 第八十二段 四條大納言隆親卿……………三六
 第八十三段 人突く牛をば……………三七
 第八十四段 相模守時頼の母は……………三八
 第八十五段 城陸奥守泰盛は……………三九
 第八十六段 吉田と申す馬乗の……………四〇
 第八十七段 よろづの道の人……………四一
 第八十八段 あるもの子を法師になして……………四二
 第八十九段 今日は……………四三
 第九十段 妻さいふものこそ……………四四
 第九十一段 夜に入りて……………四五
 第九十二段 神佛にも……………四六
 第九十三段 くらき人の……………四七
 第九十四段 達人の人を見る眼は……………四八
 第九十五段 ある人、久我繩手を通りけるに……………四九
 第九十六段 東大寺の神輿……………五〇
 第九十七段 諸寺の僧のみにもあらず……………五一
 第九十八段 揚名介に限らず……………五二
 第九十九段 横川の行宣法師が……………五三
 第一百段 吳竹の葉細く……………五四
 第一百一十段 退凡下乗の卒都婆……………五五
 第一百一十一段 十月を神無月といひて……………五六
 第一百一十二段 勅勘の所に収かくる作法……………五七

第二百四段 犯人を笞にて打つ時は……………一〇一
 第二百五段 比叡山に……………一〇二
 第二百六段 徳大寺右大臣殿……………一〇三
 第二百七段 龜山殿建てられんまで……………一〇四
 第二百八段 經文などの紐を結ぶに……………一〇五
 第二百九段 人の田を論ずるもの……………一〇六
 第二百十段 喚子鳥は春のものなり……………一〇七
 第二百十一段 よろづの事は……………一〇八
 第二百十二段 秋の月は……………一〇九
 第二百十三段 御前の火爐に火をおく時は……………一一〇
 第二百十四段 想夫戀さいふ樂は……………一一一
 第二百十五段 平の宣時朝臣……………一一二
 第二百十六段 最明寺入道……………一一三
 第二百十七段 ある大福長者のいけぐ……………一一四
 第二百十八段 狐は人にくひつくもの也……………一一五
 第二百十九段 四條黃門……………一一六
 第二百二十段 何事も邊土は……………一一七
 第二百二十一 建治弘安の頃……………一一八
 第二百二十二段 竹谷乗願房……………一一九
 第二百二十三段 鶴のおほいごのは……………一二〇
 第二百二十四段 陰陽師有宗入道……………一二一
 第二百二十五段 多久資……………一二二
 第二百二十六段 後鳥羽院の御時……………一二三
 第二百二十七段 六時禮讀は……………一二四
 第二百二十八段 千本の釋迦念佛は……………一二五
 第二百二十九段 よき細工は……………一二六

第二百三十段 五條の内裏には……………四四三

第二百三十一段 園の別當入道は……………四四四

第二百三十二段 すべて人は……………四四七

第二百三十三段 萬のさあらしと思はば……………四五〇

第二百三十四段 人の物を問ひたるに……………四五二

第二百三十五段 主ある家は……………四五三

第二百三十六段 丹波に出雲……………四五五

第二百三十七段 柳箱に据うるものは……………四五七

第二百三十八段 御隨身親友が自讃さて……………四六八

第二百三十九段 八月十五日……………四六九

第二百四十段 しのぶの浦の……………四六九

第二百四十一段 望月の圓なる事は……………四七四

第二百四十二段 さこしなへに……………四七七

第二百四十三段 八になりし年……………四七

新譯 徒然草目次終

新譯 徒然草

ト部兼好作
秋梧生譯註

●發端
淋しさのあまり、終日筆硯を
友とし、事にふれ物に感ぜし
ままた、只みだりに書き立て
し故、他人見ばさぞ可笑しき
ことならん、筆執りし吾れさ
へ、何ぞなり氣遣ひみて見ゆ
れば也。

○發端 徒然なるままに
徒然なるままに、日ぐらし、硯に向ひて、心にう
つりゆくよしなしごとを、そこはかどなく書きつ
くれば、怪しうこそ物ぐるほしけれ。

●發端 徒然は、爲す事もなく物さびしきこと。たいくつ。無聊
日ぐらしは、ひねもす。終日。●心に云云は、心に思ひも
し感じもしたる人生自然の事どもを●そこはか云云は、漫然

●第一段

そも、吾人が此世に生れ
いでては、遂げんとする事、
得んとする事、千百にして
足らざるべし、其事ども
をば書き見んか。
天皇陛下の御位のことを申し
奉るは、深くおそれ多き
次第にして、苟も人臣とし
て口にすべきにあらず。皇族
の御するすまで、凡人の種

即ちさりさめもなく筆執りて見るその義。●怪しう云云は、
少々變に狂氣じみた沙汰なりその義なり。

○第一段 いでやこの世に

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事
を多かめれ。

註解 いでやは、發語にして「いで」「や」の感動詞を結合した

るもの。「いざ」「まれ」「ざりや」の義に當るも、此にて
は「そもそも(抑)」と解すべし。何となれば、「この世に生
れては」に對し、由來を説起す冒頭語となり居ればなり。
●多かめれば、おほきやうなりとの義。

帝の御位は、いども畏し。竹の園生の末葉まで、
人間の種ならぬぞ、やんごとなき。一の人の種

とは異なること、いとも尊し
人臣として第一位たる攝政又
は關白の身の上はいふまでも
なく、一の人の以外にても、
儀仗兵をたまはる程の身分
の人々は、いとも嚴かに憚る

べく見らるるなり。そのおか
げ、子孫にもうち及び、た
ゞひ零落したりさて、なほ優
雅の掬すべきものあり。それ
より以下の人々は、その身分
に應じ、それく一時の
勢力を得、心ざし成り名あ
らばれ、さも自慢氣の鼻高う

りさまは更なり、ただ人
は、ゆゆしと見ゆ。その子、孫までは、はふれに
たれど、猶なまめかし。それより下つ方は、程に
つけつつ、時に遇ひ、したり顔なるも、自らはい
みじと思ふめれど、いど口惜し。

註解 竹の園生は、竹の園に同じ。梁の孝王の竹園の故事、皇

子又は親王の異稱。●末葉は、皇子又は親王の子孫の義。御
末裔。●人間の種云々は、竹の園生の御方々の貴きを云ひし
語。●一の人は、攝政又は關白の異稱。●更なりは、いふま
でもなく。勿論。●ただ人は、なみのひと。平民。凡人。此
にては、一の人以外のもの。●舍人は、天皇及び皇族に近侍
する雜掌。近衛の舍人。下級の隨身。今の護衛兵に相當す。

し、おのれに勝るものなしと思ふべきもよそめより見るべきは、**筆**にがくしき事なり。かく筆執り去れば希望をば官位官途にかけても、また面白からずなり。世の人にさまざまの階級わかれたれど、世の事には羨ましきも少なからざれども、僧侶のみは好ましからず。かの枕の草子にける、人には木の橋の如く、度外視せらるる、この語、まことに我が意を得たり、清少納言の筆おもしろし

● 際は、みぶん。ぶんさい。ゆゆし云云は、いみづかるべく懸かに見える。● はふれにたれどは、零落はしたさいふもの。● 猶なまめかしは、それでもまだ優美なり。● 時に遇ひしたり顔なるもは、時を得て立身出世し、得意げの鼻うごめかすも。● いさは、いたく。甚だ。おほいに。● 口惜しは、のこりをし。くやし。蓋し此にては、片腹いたし。にがくしきこの意。

法師ばかり、羨ましからぬものはあらず。『人には、木の端のやうに思はるるよ』と、清少納言が書けるも、げにさる事ぞかし。勢猛にののしりたるにつけて、いみじとは見えす。増賀聖の言ひけんやうに、名聞苦しく、佛の御教に違ふらるるなぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なか

氣よく大聲いだしたりして威張りたりして、決して凡非とも勝れたりとも見えす。増賀聖が言はれし如く、世に虚名を求め賣るなどの賤しき行為をするは見苦しく、終に佛道の本意にも叶はじ。こそ思ふ。それよりは、純粹なる沙門として世に立つかけつく、僧侶の僧侶たる點あるべし。斯く筆執り去れば、僧侶もまた顔る面白からざるなり。人さ生れしからは、容貌さては姿勢、美しき上にも美し

註解 木の端は、きざれ。つまらぬ物の義。● 清少納言は、肥後守清原元輔の女にして、一條天皇の后に奉仕し、夙に才學二つながら秀で、著はすに枕草子あり、木の端の句は、其書中に見ゆ。● ののしるは、喧呼す、聲高に呼ぶ。ののめく。● いみじは、はなはだし。此にては、俗に云ふ「えらい」この意。● 増賀は、諫諍大夫橋恒平の子、十歳にして叡山延暦寺に入り、慈惠僧正の弟子となる。聖は、高德の僧の稱。また、僧侶の敬稱。● 名聞は、ほまれを求めん爲めになすこと増賀聖、その師慈惠の僧正に任ぜられて喜べる時、異様の體にて前驅し「斯くて名聞こそ苦しかりけれ、かたいにのみこ

らん事を願ふべし。物のいひ
ぶり、優しくあたりよく、愛
嬌自からあらはれて、口か
す多からぬ程ますく、奥床し
く、いつ迄も厭はしき念起ら
ず、却て久しく相對坐こそし
たく思はる。美しくも愛すべ
く見てとりし人の、意外にも
物言ひ應接ふりに、思ひしよ
りも悪しき點が見えなごすれ
ば、如何にくちをしかるべき
ぞ。見えてはまごに残念至
極なり。
人の品位容貌は、もご是れ天

よりうけしもの、今更如何さ
もなしがたけれごも、心ばか
りは争でか賢き上にもかしこ
く、爲しがたき事は決して無
く、學問さへすれば、如何な
る賢者にもなり得べし。たご
ひ、容貌よく心術正しき人さ
いへごも、才智なり學問なり
技藝なり無き事に立ち至らば
品位おち、容貌の見にくき人
に實際しても、比ぶべくもあ
らぬ程壓倒せられたる。まご
さに遺憾のきはみなり。心外
なるごごなり。

六
そ頼もしかりけれ、ご歌ひて打囃されにけり」かものちやうめい、
●ひたぶるは、ひたすら。いちつ、専一又
●世捨人は、僧侶。桑門。●なかなかは、かへつ
けつく。●方もは、點もごの義

人は貌ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほし
かるべけれ。物うち言ひたる、聞きにくからず、
愛敬ありて、ことば多からぬこそ、飽かず、向は
まほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらる
る本性見えんこそ、口惜しかるべけれ。

註解 貌ありさまは、容貌姿勢。かたちやうす。●物うち言ひ
のうちは、接頭詞にして、言ふ。●飽かず云々、いつまで
愛嬌に同じ、人すきのすること。●飽かず云々、いつまで

七
しな貌こそ生れつきたらめ、心は、なごか、賢き
より賢きにも、うつさば移らざらん。かたち、心
ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり、顔
にくさげなる人にも、立交りて、かけず、氣おさ
るこそ、本意なきわざなれ。

註解 しいな貌は、品位容貌。●なごかは、何ごして、
●賢きより賢きにも云々は、論語の學而篇に見ゆ
「色」より出でしものなるべし。人の賢を賢さし



ツ
ク

されば、人として具へたきは
品位容貌より、心のみがき
賢き上にもかしくくるが
第一なり。實際に身につけお
きたき事どもは、四書六經の
教ふる所の國家を治むる道と
詩文を作ることと、和歌をよ
むと音楽のわざなり。この外
に故實などの事を取調ぶる學
問と、宮中にての行事作法の
かすく、みな人の龜鑑と
ちあがめらるる、まことに勝
れたる事なるべし。文字もほ
ど、に遠きに書き、聲面白

む心に易ふるは、善を好むこと誠ありとの義。
才智又は學問、技藝。●品くだりは、品位のさ
かけず云は、比較のてけぬやうに壓倒さるるのは。
意なきわざなれば、本來の意志でなく、實に残念至極なり
の意。

ありたき事は、實しき文の道、作文、和歌、管絃
の道、また、有職に公事の方、人の鏡ならんこそ
いみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲
をかしくも、拍子どり、いたましようするものから
下戸ならぬこそ、男はよけれ。
註解 實しき文の道は、四書六經の教ふる國家を治むる道。
作文は、詩文を作ること。●管絃は、笛の類と琴の類、轉じ

く吟様などの調子取りて、歌
ひ、酒さされしをりに遠慮し
て辭退すれど、男子は何れか
さいへば、少々飲む方がよく
全然の下戸は興なし。

て音楽の義。道は、わざ。●有職は、故實などの事を取調ぶ
る學問。又、それを善く知りたる人。●公事は、おほやけの儀
式。朝廷にて行はるる事柄。こうじ。●人の鏡は、人の龜鑑
世のてほん。●手は、しゆせき(手跡)。文字。●いたましよう
するものからは、遠慮して辭退はするけれども。●下戸云云
は、戸は酒を飲む量、下戸は酒をのみえぬ人。此にては、男
子は少しは酒を飲む方が可きの義。

○第二段 古の聖の御代

古の聖の御代の政をも忘れ、民のうれへ、國
の害はるるをも知らず、よろづに清らをつくして
いみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて
思ふどころなく見ゆれ。

●第二段

古昔の聖天子の御政道は、一
に儉約仁惠にあることを忘却
し、下民のなんぎさては國家
の損害をも顧慮せずして、事
ごみに華美をしつくしてよき

事さし、あたり狭しこふるまふ人は、如何にも心外にたへず淺ばかに見ゆ。
「装束さなく冠さなく、馬や車の類に至るまで、みな在來のものを使用すべく、華美を求むまじきぞ」とは、九條師輔公言ひ殘されし戒めなり順徳院の御記録にも「天皇のめしものは、質素なるがよし」と見ゆ。

一〇
註解 古の聖の御代は、むかしの聖天子の御宇。●民のうれへ云云は、人民のなんぎや國の疲弊を心におかぬの義。●よろづに云云は、萬事に華美をしつくして。●所せきは、所狹き。●うたては、轉の字を宛て用ふ。あまり。あんまり。所によりては、「けしからぬ」と云ふ程の意にも用ふ。
「衣冠より馬車に至るまで、あるに従ひて用ゐよ美麗を求むる事勿れ」とぞ、九條殿の遺誠にも侍順徳院の、禁中の事ども書かせ給へるにも「おほやけの奉り物は、おろそかなるを以てよしとす」とこそ侍れ。

註解 九條殿は、右丞相師輔公のこと。●遺誠は、死後にのこされたるいましめ。●順徳院は、第八十四代の天皇。御

●第三段

すべて事に秀でたりとも戀愛のいかなるものかを知らぬ男子は、何さなう物足らぬやうに思はれ、所謂玉の杯に底なき感じせらる。露や霜に打たれて彼處此處にさまよひ、兩親の教訓や世人の笑をしのび、そのゆききに心をいため逢ふ事出来で獨寢のまくら、

○第三段 よろづにいみじくとも

萬にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうくしく、玉の卮のそこなき心地ぞすべき。露霜にしはたれて、所定めず感ひ歩き、親のいさめ、世のそしりを包むに、心のいとまなく、あふささるさに思ひ亂れ、さるは、獨寢がちに、まごろむ夜なきこそ、をかしけれ。然りとて、只管たはれたる方にはあらで、女に容易からず思はれんこそ

暫し夢路たざる能はぬ夜ほど
戀路は面白し。しかし、一途
に愛におぼれたる方ではなく、
眞實心ありて女に侮られぬ
風にするのが、戀路としては
可るべし。

●第四段
死後さいふ點を心によく記し
て、佛道の事を心得てなるの
は奥床し。

あらまほしかるわざなれ。

註解 萬にいみじくもは、萬事にぬけいでても。●さう
くしは、物さびし。ものたらぬ。●しほたれては、濡る
義。●所定めず云は、かしこ此處にさまよふこと。萍遊す
ること。●いさめ(諫)は、さとし。教誡。●あふささるさは
あちらこちら。ゆきがへり。●さるは、然るは。さあるは
さる故に。●まごろむは、暫時の間おのづか眠る。我れ知ら
ず暫し眠る。●なかしは、おもしろし。●容易からずは、輕
々しくこの義。●わざは、事なり。

○第四段 後の世の事
後の世の事、心に忘れず、佛の道うとからぬ、心
にくし。

註解 後の世は、後世。死後。●心にくし。奥ゆかしく思はる
ることの義。

○第五段 不幸にうれひに沈める人の

不幸に、うれひに沈める人の、かしらおろしなど
不束に思ひとりたるにはあらで、在るか無きかに
門さしこめて、待つ事もなく、明しくらしたる。
さる方にあらまほし。顯基中納言のいひけん『配
所の月、罪なくて見んこと』さもおぼえぬべし。
註解 不幸は、ふしあはせ。薄命。轆轤。●かしらおろしは、
頭髮をそりおさすこと。剃髮。●不束に云は、うれひで沈
める故に世を捨てたるには非ずこの意。●在るか無きかに云

●第五段
身のふしあはせを歎するのあ
まり、この浮世をはかなみ、
終に僧尼になるが如き、心よ
わき厭世でなく、其人の住む
かさまで疑はるるほど。柴門
深くささして幽靜に、つゆば
かりも名利を求むるの念なく
世の外に日を送る。隱遁者さ
してはありたき事なり。顯基
卿は、罪を犯さずして、静け

き深山孤島に月を眺めたし言はれけるが、まことに然か思はるべし。

●第六段

自分の身の尊いにもせよ卑しきにもせよ、何れにしても子さいふものは無くてよし。兼明親王も、伊道公も、有仁公もみな血族のたえ盡きはつるを希望なし給へり。染殿大臣は、子孫のなき方よろし、末

々の者が先祖よりも劣るは善からず、大鏡即ち世繼の翁の物語にも見ゆ。聖徳太子の御生存中、みづなら御陵を設け給ふや、此處を切去れよ彼處をたち除けよ、斯くして自分には子孫の無いやうに思ふなり、と仰せられしこの事なり。

云は、人の住居して居る居らぬかのやうに、門をさざして名聞を求めず、塵外に歲月を送るその義。●さる方に云云は、さいふやうに有りた。●顯基中納言は、後一條院の近習の一人。●大納言俊賢の嫡子。●配所は、左遷せられたる地。●論所。●おぼえぬべしは、思はるべしこの義。

○第六段

わが身のやんごと無からんにもざらんにも、子さいふもの、無くてありなん。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みなぞう絶えんことを願ひ給へり、染殿の大臣も「子孫おはせぬぞ、よく侍る。末のおくれ給へるは、わろき

ことなり』とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖徳太子の、御墓を、かねて築かせ給ひける時も、「こゝを切れ、かしこを断て、子孫あらせじと思ふなり」と、侍りけるこや。

註解

この意。●前中書王は、前は、まへ。中書は中務の唐名、王は親王。此處にては醍醐帝の皇子兼明親王を申す。●後中書王は具平親王を云ふ。●九條太政大臣は、伊道公。●花園左大臣は、有仁公。●輔仁親王の御子にして、後三條帝の皇孫。●みなぞうは皆族。御三人のかたぐは何れも、血族の絶え盡きん事を希望なされた。●染殿の大臣は、太政大臣良房公のこと、京都の染殿と云ふ所に居られし故の名。その舊址は、

一六
御苑内の東、清和院址に同じ。●聖徳太子は、用明天皇の第一皇子、生前に御陵墓を築かせられたり。

●第七段

あだし野に極のかけ絶え鳥部の野に火葬のけぶりなびかす、世の人々長くいのち保たば、いかでか人生の趣味あるべき人情も知られ、吾人に善心の起るのは、この無常あるが故なり。されば、無常ば却て貴けれ。
生きとし生ける物を見るに、人ほご壽命の長きもの他に

○第七段 あだし野の露

あだし野の露、きゆる時なく、鳥部の野の烟、立去らでのみ、住みはつるならひならば、いかに、物の哀もなからん。世は定めなきこそ、いみじけれ。
註解 あだし野は、仇野、徒野などの字面を用ふ。墓地のここの處にては山城の嵯峨野のほざりに在る共同墓地を指す。●鳥部野は、京都阿彌陀峰の麓に在る火葬場。●住みはつる云云は、人のいつまでも死せず居るものならば。●いみじければ、無常なるのが妙趣がある云ふ程の意。
命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。か

げろふの、夕を待ち、夏の蟬の、春秋を知らぬもあるぞかし。つくぐと、一年をくらすほどだにも、こよなうのごけしや。

註解 人ばかりは、人程。人ぐらゐ。●かげろふは、蜉蝣のこと。朝に生れ夕に死ぬるさいふ蟲。はかなき喩に借る語。●つくぐとは、つらく(熟)。じつと。よく。●こよなう云云は、此上もなく長きものではないかとの意。

飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢のこころこそせぬ。住果ぬ世に、みにくき姿を待ち得て何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬ程にて死なんこそ、目やすかるべし。

し。蜉蝣は朝に生れて夕を待ちて死に、夏蟬は春も秋も知らずして死するにますや。つらく考ふれば一年の光陰をすこす事さへ、するぶん優に長き心地するぞかし。限りなく壽命をのぞまばたさひ千年の長きを生きのぶさも、僅か一夜の夢の如き心すべし。いづれ一度は死ぬべき身を、見苦しき老のすがたに及ぶを待ち得たりさて、果して何をかすべき。壽長ければ恥多し、ま莊子にも見えぬ。長生して

も、四十よそぢそこくにして此世このよを辭ひするほど、世の手前見てまへみよきものは有あるまじ。
 四十よそぢをいづれば、老おいに傾かたきし醜みにくきすがたを心にさめず、無遠慮ぶゑんりょに衆中へ出て交際かうさいせんと欲ほし、夕日に等ひとしき身の壽いのちながら、尙子孫なほしそんを寵愛ちゆうあいして、その立身出世たてしんしゅっせを得るまでもの生存せいぞんを豫期よきしいちづに此世このよの縁えんをたちかたく、ただく壽じゆ命めい長ながかれかしの念ねんふかく慈悲じひも人情にんじやうも人生にんじやうの如何いかんも知らざるに至いたるは、あきれはて

れ。

註解 住果ぢうくわぬ世よには、一度は死しする此世このよに。●みにくき姿すがたは、見苦みくるしき老人らうじんのなり。●命長めいながければ云いは、莊子さうしに基づく語ことば天子篇てんしに「壽則多じゆ恥ち」とあり、壽じゆは「いのちながければ」を訓くす。●目めやすかるべければ、見苦みくるしくなくて可よらう。
 その程過ほどぎぬれば、かたちを恥はづる心こころもなく、人ひとに出いで交まはらんことを思おもひ、夕日ゆふべに子孫しそんを愛あいして榮さかゆく末すえを見みんまでの命いのちをあらまし、ひたすら世よを貪むさぶる心こころのみ深く、ものの哀あはれも知らずなりゆくなん、淺あさましき。

なる事ことなり。

●第八段

人の心こころを感亂わんらんするものは色欲しきよくに及およぶものなし。人の心こころは淺あさましくも物の道理だうりに暗くらきもの哉かな。香かの如ごときは、もごまり假かりのものにもせよ、暫時しばしのま衣服いふく蕭せうらせるよさ知りながら、口くちにしがたきよき香かには、きツこころと心動こころうごきやすきものぞかし久米仙くみせん、小川こがわに物ものすすぐ女の

○第八段 世の人の心惑はす事

世よの人の心こころ惑まどはす事こと、色慾しきよくには如ごとかず。人の心こころは愚おろかなるものかな。にはひなどは、假かりのものなるにしばらく、衣裳いしやうにたきものすと知りながら、えならぬにほひには、必ず心こころときめきするものなり。
 註解 如ごとかずは、越こすものなし。及およばず。●にはひは、俗ぞくに、「句く」の字じを用もちふ。か。香氣かうき。●衣裳いしやうにたきものすは、簪かんふせに衣服いふくをかけ、香料かうりやうにて蕭せうす。●えならぬは、何なんともいへぬ。●心こころときめきは、心こころの動うごくこと。

塵の色白きに見され空中飛行の神通力を失ひて墮落せしこといふ事は、まことに道理至極の事なり。そは何故ぞならば、その女の手足肌膚うつくしく、色しろく、而も脂肪のりたる如き、假のものならず眞の色なればなり。

●第九段

婦女子は髪かみの毛美けうつくしからば、人目ひとめをひきやすし。人品じんぴんや心ゆきなごは、障子襖しょうじうすまをへだてたりとも、その物の言ものことひぶり打ち聞うちきこくも、それぞ推量おしはからるるなり。何事なにことにても、かりそめの舉動きよどうにつけて人の心を迷まよばし、概がいして婦女子は男に對たいして心ゆるしながら、常に身みだしなみの一點いってんを重おもんずれば、假令たとひ横よこにふしまるべばさて、熟睡うまいはせず。出来できがたき事を耐たへしむふは、ただ、自分じぶんの様子やうす

久米の仙人くめせんじんの、もの洗あらふ女をんなのはぎの白しろきを見て、通つうを失うしなひけんは、まことに手足てあし肌はだなどの、清きよらに肥こえ、あぶらづきたらんは、外ほかの色いろならねば、然さもあらんかし。

註解 久米の仙人は、和州葛上郡の人、深山に入りて仙術を修め、空をかけるに自在なりしとぞ。●はぎは脛すね(すね)なり。●通は、神通力、空を飛行する仙術。●あぶらづきは、脂肪ののること。●外の色云云は、まことの色の義ぎは、白樂天の句に、假色迷ハスヲ人猶ヒト若ニシ是、眞色迷ハスヲ人應ヒト過ニ之ガあり。●かしは、最も至極もつとと強つよめて言いひし語。

○第九段 女は髪かみのめでたからんこそ

女をんなは、髪かみのめでたからんこそ、人ひとの目立めだつべかめれ。人ひとの程ほど、心こころはへなごは、ものうち言いひたるけはひにこそ、物越ものこしにも知らるれ。

註解 髪かみの云云は、頭髮とうはつがうつくしかつたら。●人ひとの程ほど心こころはへは、人品じんぴんや心こころゆき。●けはひは、やうす。●物越ものこしは、障子しょうじふすまなご隔へだてて居をること。

事ことにふれて、うちある様さまにも人ひとの心こころを惑まどはし、すべて、女をんなの打解うちとけたる、いも寝ねず、身みを惜おしども思おもひたらず、堪たふべくもあらぬわざにも、よく堪たへ忍しのぶは、ただ色いろを思おもふが故ゆゑなり。

註解 うちある様は、一寸ちよささしたる舉動きよどう。●いも寝ずは、女は

をよく見せんと思ふ愁故なり
げに、愛情にひかざるるこい
ふこそは、根ざしも深く起り
も亦遠し、眞性をけがす六種
のもの、皆樂しまん願ふ愁
情なれども、盡くこれなれ
ひ去るを得べし。中につきた
だく彼の色慾の迷ひの、一つ
ばかりは、老人も若人も、智
者も愚者もおしなべて、同じ
事こそ思はる。

さるが故に、婦女子の髪に
てなへる綱にては、力づよき
大きやかなる象をも繫き止め

婦女子の穿きし下駄にてしつ
らへし鹿笛には、秋の小牡鹿
必ず戀ひ来さいふ。みづから
心を堅固にし、戒しむる上に
もつつしまほしきは、此の色
慾の迷ひならずばあらざるな
り。

●第十段
人の住家は、間取その他の事

男に對して心ゆるして居りても、身だしなみさの事を重んず
れば、横になりてれても、よく入れ入らすさなり。●堪ふべく
云云は、到底でけさうもない事をこらふるのは外でもない、
ただ自身の様子を善く見せんが爲め故の義。
まことに、愛着の道、その根深く、源遠し。六
塵の樂慾多しといへども、みな、厭離しつべし。
その中に、ただ、彼の惑ひの、一つ止め難きのみ
ぞ、老いたるも、若きも、智あるも、愚なるも、
かはる所なしとぞ見ゆる。

●六塵は、佛法にて眞
性をけがす六種のもの。即ち色・聲・香・味・觸・法の稱。●樂
欲は、たのしまん願ふ欲情を云ふ。●厭離は、いさひて離

れ去ること。●彼の惑ひのは色慾をさして云ひし語。●かは
る所は、ちがふ所。こころなる所。
然れば、女の髮筋をよれる綱には、大象も、よく
つなぐれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋
の鹿、必ず寄るごぞ、いひ傳へ侍る。自ら戒しめ
て、恐るべく、慎むべきは、このまごひなり。

註解 髮筋は、かみげ。大威徳陀羅尼經に「乃至女人の髮を以
て、綱羅を作らば、香象能く繫ぐ、況や丈夫の輩をや」とあ
り。●このまごひは、云ふまでもなく、色慾をさしての語。

○第十段 家居のつきくしく
家居のつきくしくあらまほしきこと、假のやど

ども、すべて似つかはしきぞ
好まし。暫しの住所なり。此
世も一時の宿さは思ひつつ、
また別段に面白きものなり。
身分よき人の悠々さしづかに
住まふ所は、座を照す月かけ
さへ、一しほ身にしてみてすぐ
れたる感じぞする。當世風
に華麗にはあらざれども、庭
の竹木のさびて、殊更に移
し植ゑしとも思はれぬ小草ま
で、おもむき淺からず眺めら
れ、竹縁さいひ透垣さいひ、
何から何まで工合よく風流に

乙ケキ、わげり、
りとは思へど、興あるものなれ。
よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入
りたる月の色も、一きはしみと見えゆるぞかし
今めかしく、きららかならねど、木立ものふりて
わざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子、透
垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔覺えて、
安らかなるこそ、心はくしど見ゆれ。
註解 家居の云は、住居のふさはしき點。●かりのやどりは
暫しの住所。廣義にいへば、此世の一時のかりのやど。所謂
天地は萬物の逆旅との義が。●よき人は、あてびき。●身
身分ある人。●今めかしくは、當世風らしく。●簀子は、竹

(了した)

手道具類も古風にて、
餘り人工を加へざるものある
は穩當にて、主人の心も奥床
しく思はる。
あまたの大功が技倆の程をあ
らばし、美事に造り上げたる
家に、和漢さり々の珍奇な
る道具をそなへ、楠ふし草木
の類まで、手を入れて不自然
に作りなすは、眺め面白か
らずして且ついさばし。さて
久しく住む所なるべきか、然
らず。又、火起らば忽ち焦土
に歸せんなど、一目見ても知

のえんがは。●透垣は、すきがきの音便、竹をならべてすき
目あるやうに結へる垣。●たよりをかしくは、位置又は工合
が風流即ち面白い。●調度は、だうぐ。●昔覺えて以下は、
古風の程も見えて其穩當なるのは、如何にも奥床しく思はれ
るさの意。
多くのたくみの、心をつくして磨き立て、唐の、
和の、めづらしく、得ならぬ調度ももならべ置き
前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、
見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは、なが
らへ住むべき、また時のまの烟ごもなりなどぞ
うち見るより思はるる。大かた、家居にこそ、こ
とざまは、推量らるれ。

ちるる。そうじて、その住家のさまにより、主人の性格何かが窺はれやすきものなり。大臣後徳大寺のおもて座敷の屋根に、鶯をして止まらせまじし、繩張られたるを西行法師が見て、一鶯さまりしとて争てかきさふべきぞ。後徳大寺殿の心中、この一事にて知られたり。さて、其後再び伺はざりしと聞きたるが、性惠法親王の小阪殿の屋根に、いつか繩を張られしを見しが、端なくも後徳大寺が鶯の事お

もひだしぬ。打ち開けば鳥群れゐて、泉水の蛙をさりし故そを不慍がりて斯様になされしと、或人の話したるにより其譯知りけるが、それでは慈悲深き御心より出でしかと思はれぬ。後徳大寺の方にも、何等かの理由のあつて、例の繩を張られしこそならん、西行法師は卑しめたれども。

註解

たくみは、だいく、即ち工匠。前裁は、草木をうゑこみし庭園。●心のまま云云は、庭園の植木が人工に成り、自然にそむけるは不風流にもわづらはしこの義。●また時の上の烟は、かうしていつまで住む事が出来るかばさておき、一朝火事にて焼けたらば。●うち見る以下は、一寸見ても、ぼぼ其事が推量さるるなり。

後徳大寺の大臣の、寢殿に鶯居させしとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「鶯の居たらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後、参らざりけりと聞きはべるに、綾小路宮のおはします、小阪殿の棟にいつぞや、繩を引かれたりしかば、彼の例思ひい

でられ侍りしに、まことや「鳥の群れゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと、おぼえしか。後徳大寺にも、如何なる故か侍りけん。

註解 後徳大寺の大臣は、左大臣實定公を云ふ。●寢殿は、おもてこてん。正寢。正殿。●西行は、西行法師。もご後鳥羽上皇の北面の武士、右兵衛尉義清のこご、僧となり圓位ご號し、のち西行ご改め、和歌を以つて有名に、足跡天下に徧し。●さばかりは、これぐらゐ。●綾小路宮は、性惠法親王、龜山帝の皇子なり。●彼の例は、後徳大寺の例を云ふ。●まごこごやは、物を思ひ出したる時に前にお、さては、感動詞にして、それでは、しからば。

● 第十一 段

十月のころほひ、栗栖野を打ちすぎ、或山村にわけ入りしが、その途中は細徑、苔深く蒸して幽なりけるが、見出したるは淋しげに住まへる草庵なりけり。音なうものは落葉くぐる笈の水のみにて、外に訪ふ人なしと思はるるに、關伽棚には菊、紅葉などちらされ有るにつけ、さては此にも住む人ある故ぞ知られき。かかる淋しき地に、よくも住まれけるかなと深く隣れ罷し

○ 第十一 段 かみな月の頃

かみな月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るる笈のしづくならでは、露おとなふものなし。關伽棚に、菊、紅葉など折散らしたる、流石に、住む人のあればなるべし。斯くてもあられるよと、哀に見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の枝もたわわになりたるが、まほりを厳しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木無からましかばとおぼえしか。

たるに、向ふの方の庭に、枝も折れんばかりに鈴成りせる柑子蜜柑の周圍には、いかめしきふせぎの垣、これ見て聊か興うせ、此柑子蜜柑あらでもがなご思はれぬ。

● 第十二 段

氣のあひし友人と、心靜かに談話し、面白き事さては世の無常なる事、かくし隔てなう互に慰めあはば、さぞ樂しかるべきも、斯る人は到底な

○ 第十二 段 同じ心ならん人と

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそ、嬉しがるべきに、然る人あるまじければつゆ違はざらんと向ひわたらんは、獨ある心ちや

註解 かみな月は、俗に神無月と書す。陰曆十月の異稱。栗栖野は、山城の醍醐あたり。露おとなふは、少しも訪問する。關伽棚は、佛に水又は供物などをなふる棚。流石に、それでもこの意。柑子は、かうじみかん。枝もたわわには、枝もたわわみて折れんばかりに。まほりは、周圍。少しことさめは、ちと興さめ。聊か不風流に。おぼえしかは、思はれたりこの意。

せん。

註解 同。心ならん人は、氣のあひし人。同趣味の人。●こめ
 やかは、しみん。●うらなくば、かくさす、へだて心なく
 ●さる人は、さやうなる人。●つゆ云は、少しも違ふまじ
 ●勉めて先方に對したならば、ただ一人居る心地すべしと
 なり。

互に言はんほどの事をば、げにと聞く甲斐あるもの
 のから、聊か違ふ所もあらん人こそ、『われは、
 さやは思ふ』など、争ひにくみ、『さるからさぞ』
 ども、うち語らばは、つれなく慰まめと思へど、
 げには、少しかこつ方も、我どひとしからざらん

るべければ、氣の合はぬ人
 對し、その心にそむくまじ
 仕向けんは、自分一人居る心
 すべし。
 互に語り合ふことを實に然り
 さするかはりに、又反對する
 所ありて、言ひ争ひつ、理を
 きはめつ、さまざまに話の花
 さくゆゑ、無聊をも醫べしと
 おもへど、其實をいへば、少
 々言ひたてする人も、われと
 氣のあはぬ人も、世間一通り
 のむだ話をしてゐる間は面白
 けれども、眞實の友に比して

見れば大に懸隔ある點、ま
 さに不愉快極まれり。

人は、おほ方のよしなしこと言はん程こそあらめ
 まめやかなる心の友には、遙に隔りたるどころの
 ありぬべきぞ、わびしきや。
 註解 さやは思ふは、さやうに思ふか、思ひはせぬ。争ひにく
 みは、言ひ合ひ相手になる言ふ程の軽い意味。●かこつ方
 は、言ひだてすること。大方のよしなしことは、役に立たぬ
 世間ばなし。むだばなし(閑話)。●まめやかは、忠實。●わ
 びしきやは、不愉快極まれり。なやましや。

○第十三段 ひとり燈の下に

ひとり燈の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を友
 とするこそ、こよなう慰むものなれ。書は、文選

●第十三段

蕭然として只一人燈下に書を
 ひもさきて古人と相親しむ、
 又なく心たのし。よむべき書

は文選、白氏文集、老子、莊子より。我國の學者のものせるものは、古昔の面白き筆多し。

●第十四段

今も猶むかしの如く、興味多きは和歌にぞある。いぶせく賤ししき樵夫のなりはひも、三十一文字よめば趣ふかく、猪の如きあらしくしきものも、ふす猪の床と筆執れば、優美にきこゆ。近來の和歌は、一應は面白く工夫し、題意にあへりと思はるるはあれど、古歌のよみくちに比しもせば、果して如何に。見よ、言外に餘情の擲すべきものはあらず。實之が「絲に」まよめる一首

のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。

註解 見ぬ世云は、讀書して古人を友とするが云ふ程の意。文選は、周末より六朝までの文章詩賦を集めたるもの、梁の昭明太子の選述、原本三十卷なりしが、唐の李善これに注を作りて六十卷とす、今日傳ふる所のものは即ち是なり。●白氏文集は、唐の白樂天の詩文集。●老子のことばは、老子の説きし道徳。●南華の篇は、莊周の書、即ち莊子。莊周は南華真人と號したり。●あはれは、面白きこと。喜ぶべきこと。

○第十四段 和歌こそ猶をかしき物なれ

和歌こそ、猶をかしき物なれ。あやしの賤山がつしのわざも、言ひいづればおも白く、おそろしき猪も、ふす猪の床といへば、優しくなりぬ。

註解 あやしの云云は、賤しきこり草かりのする仕事も。●おそろしき猪云云は、八雲抄に見ゆる一寂蓮法師が言ひけるは、歌のやうに、いみじきはあらじ、猪なごいふ怖ろしき物を、ふす猪の床など云ひつれば、優しきなり。此には正しく之を引けるなり。

このごろの歌は、一ふし、をかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覺ゆるはなし。

は、古今集の中の最も拙なる和歌と言ひのこされたるも、現代の人々よく口にのぼすべくも覺えず。貫之時代の歌には調も詞もかかる類のもの多し。斯く非難の聲起れるは合點ゆかす。源氏物語には「絲によるものさばなしに」を改め載せたり。式部が筆入れしを考ふれば、歌屑といふ理由はこゝに存するか、新古今集には「冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ嶺に淋し

註解 一ふしは、いささほり。いちおう。古き歌は、古歌。いかにぞや云は、古歌に比すればどうであらうか、言外に含蓄がない、それでこそ、ますます古歌を思はるるなり貫之が「絲によるものならなくに」といへるは、古今集の中の歌屑とかや、いひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことからは見えぬ。その世の歌には、すがた、ことば、この類のみ多し。この歌に限りて、とかく言ひ立てられたるも、知り難し。源氏物語には「ものとはなしに」とぞ書ける。新古今には「残る松さへ峰にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけた

き」といふ歌を歌屑といふは成程道理にて、やや上下の句不釣合に思はる。さばいへ、御歌所に於ける諸家の批判の頃は、名歌の評ありて、其後後鳥羽院よりは、おほめ有し次第、家長が筆執れる御歌所の日誌にも書き残されたり。歌道ばかりは今もむかしに變る所なしと云ふ説あれど、いかか。今人もなほ古人の如く巧みに詠みいで得べきか。詞さいひ材料さいひ、同じものながら其まみ口は同じからず

る姿にもや見ゆらん。されど、この歌も、衆議判の時、よろしきよし、沙汰ありて、後にも、ことさらに感じ仰下されける由、家長が日記には書けり。
註解 貫之は、紀貫之、古今集の選者なり。歌屑は、最も拙なる歌。源氏物語は、有名なる紫式部の著。新古今集は、藤原定家の選。少しくだけ云は、やや調子の亂れしおもむき有らん。衆議判は、御歌所にて、其頃の歌人が會しての批判。沙汰は、うはさ。評判。感じ仰せ下されし由は、後鳥羽上皇のおほめ有りしおもむき。家長が日記は、源家長が筆執りし御歌所の記録。

歌の道のみ、古にかはらぬなど、いふ事もあるぞ

古歌は流暢として穩健に、調子もけだかく、含蓄も亦いみじくして餘情限りなし。かの梁塵抄に見ゆる諸物のことばは、又格別に面白きこは多きやうなり。古人はかりそめに口ずさみし事も、何故みないたく勝れて聞ゆるぞや

いざや、今も詠みあへる。同じことば、歌枕も、昔の人のよめるは、更に、同じものにあらず。や、すく、すなほにして、姿も清げに、あはれも深く見ゆ。

註解 いざやは、ごうであらうか。●歌枕は、歌によみ入れて雅なる地名。即ち名所。●歌の材料の義。●すなほ云云は、さらくとして難くせなく、調子も高尙優美に、餘韻も淺からず見ゆとの義。

梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、又、あはれなる事は、多かめれ。昔の人は、いかに言ひ捨てたる言種も、みないみじく聞ゆるにや。

註解 梁塵秘抄は、神樂、催馬樂を集めしもの、後白河天皇の御製なりとぞ。●郢曲は、いまやうぶりのうたひ。●言種は、歌謡。

●第十五段

何處にても、暫時の旅行もよほしたるは、目さきかはりの心さへ清々し。その旅路をあちこち遊覽すれば、田舎めきし土地、山村などの如きは、分けて今更のやうなる眺め多し。京への便をたづねて手紙をやり、何かの事言ひ越すを忘るまじなど注意をするのは興深し。家においては氣づかれど、旅路すればさまぐの事に心配せらる。携帯する手道具までが、善きものは一

○第十五段 いづくにもあれ

いづくにもあれ、暫し、旅だちたるこそ、目さむる心地すれ。そのわたり、此處彼處見ありき、おなかびたるどころ、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたより求めて文やる。『その事、かの事、便宜に忘るな』など、言ひやるこそをかしかれ。さやうの所にてこそ、よろづに、心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、貌美き人も、常よりは、をかしとぞ見

入善く見え、詩歌などの藝堪能なる人、さては容貌のうつくしき人も、京にてよりも目だちて見らる。神社寺院などに、人知れず参籠するも、亦おも白し。

●第十六段

内侍所の御神樂は、優美にして面白し。そうじて樂器にては、笛、箏、築よし。絶えず聞かまほしきは、琵琶、あづま琴なり。

ゆれ。寺、社などに、忍びてこもりたるもをかし
註解 目さむる心地すれば、感情あたらしく氣のかほるを云ふ
●便宜は、よきついで。たよりよき折。●調度は、てだうぐ
●能ある人は、藝能ある人。才能あるもの。●常よりはいつ
も都にて見る時よりもその義。

○第十六段 神樂こそ

神樂こそ、なまめかしく、面白けれ。おほかた、ものの音には、笛、箏、築、常に聞きたきは、琵琶和琴。

註解 神樂は、古代の音楽。又、一條天皇の御宇以来、毎年十二月に内侍所にて行はるる御神樂を云ふ。●なまめかしくは優美にして。●和琴は、やまごころ。あづまごころ。六絃の琴

●第十七段

浮世のそなる山寺に参籠し、みほさげに仕ふれば、つれづれ感ぜざるのみか、煩惱のけれがさへ洗ひ去れし思ひぞする。

●第十八段

人たるものは、みづから儉約を旨とし、驕奢を抑制して、財貨を妄りに貯へず、名利をほし、いままにせざるこそ、極めて勝れし行爲なり。古來、賢

○第十七段 山寺にかきこもりて

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁も清まる心地すれ。

註解 つかふまつるは、仕へ奉る。●つれづれもなくは、さびしき事も、たいくつも無く。●心の濁云云は、煩惱の濁をいふ。よくなる思ひするこの意。

○第十八段 人はおのれをつづまやかに

人は、おのれをつづまやかにし、おごりを退けて財をもたず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき昔より、賢き人の富めるは稀なり。

註解 つづまやかは、けんやく(儉約)。●世を云云は、名利

人にして富貴なるは稀少なり

支那に許由といふ人ありけるが、所持品何一つなく、水飲むにも手にて掬ひ居るを見て或人水汲む瓢を與へたり。許由はこれを木の枝にかけおきしに、風にふかれて音せるを打ち聞き、かまびすしとて棄て、また手にてすくひて水飲みたり。その心のうち、どれ位清爽なるべき、うち偲ぶも尊し。
また孫長といふ人は、冬の侍

欲などをほしいままにせぬが。

唐土に許由といひつる人は、更に身にしたがへるたぐはへも無くて、水をも、手して捧げて飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得させたりければ、ある時、木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて、棄てつ。又、手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり、心のうち、涼しかりけん。

註解 唐土は、古昔我國にて支那を呼びし語。許由は、隱士の名、堯が天下を譲らんさせしも、之を辭して隠れし人。なりひさごは、生瓢の字を用ふ。瓢(ひさご)に同じ。むかし

候に夜具なく、一束の藁を蒲團にかへ、夜に入れば、布き朝に至ればしまひたり。支那の人は、是等を高士のすぐれし爲爲と思へるにより、記して後世に傳へし事ならん。されど今の我が國の人等は、到底口碑に残るべきなし。

孫長は、冬の月に、衾なくして、藁一束ありけるを、夕には、これに臥し、朝には收めけり。唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、しるしごめて、世にも傳へけり、これらの人は、語りも傳ふべからず。

註解 孫長は、字は元公、家貧にして席を織り業とす、詩書に精通す。冬の月は、冬季なり。衾は、やぐ。これらの人

は、今の日本の人。

第十九段

四季の變遷は、何事につけても、めづべく面白きもののみなり。

「物のあはれさいふ事は四季の中にて秋ぞ第一」人々言ふやうなれど、更にひさしほ心動き興湧くは、春の景ならん。鳥の歌わけて春めき、ほかくさ暖かき日向に垣根の小草芽吹く時分より、すこぶる春色たけなばに、霞棚びき

第十九段

をりふしの移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ

をりふしの移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ
註解 たりふしは、春夏秋冬 移りかはるは、四時の變遷するを云ふ。

『ものあはれは秋こそまされ』と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは、心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、この外に春めきて、のどかなる日かけに、垣根の草、萌えづる頃より、やや春深く、霞みわたたりて、花も、やうくけしきだつ程こそあ

結句
さへ咲かんさする頃しも

無情の風雨つづき、心みじかく散りはつ。花より新緑までは、目にふれ耳に聞くもの、みな心いたましむるもののみなり。花橋は昔を思はしむる名をもてぞ、より一入追憶ふかきは梅の花の色香なり。山吹の清き、藤の花のたよりなき姿、一として風情ふかからぬはなし。

れ、折しも、雨風うちつづきて、心あわただ散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにた心のみぞなやます。花橋は名にこそ負へれ、なほ、梅のにはひにぞ、いにしへの事も立ちかへりこひしう思ひいでらるる。山吹の清げに、藤のおほつかなきさましたる、すべて、思ひ捨てがたこと多し。

註解 のどかなる日かけは、うららけき日光。●花橋。さける橋。名にこそ負へれば、名の通りなりこの歌に「さつきまつ花橋の香をかげば昔の人の一首に基づく。

四月八日、賀茂の祭のころ、若葉の枝清々しく茂りゆく時分は、世の趣味も人のなつか

しきも又格別さ、或人の言はれしが實に然なり。五月の節句の頃、田植する頃、水鶏の鳴くを聞くが如きは、何人も淋しくなきものはあらざらん。六月の頃、いぶせき家の垣根に夕顔の花白くほの見え、蚊遣火たくも、なか／＼風情ふかし。六月の晦日に行ふ大祓も亦面白し。

七夕祭は、優美なり、おひおひ夜氣冷かになりゆけば、雁鳴きすぎ、萩の下葉は黄ばみ早稲は刈られて乾され、さま

／＼面白きこと一時に集るは秋にかぎりて多きぞかし。又嵐吹きし朝は野の景面白し。斯く續けさまに筆執れば、みな源氏物語や枕の草子等の書に、書きに書かれし事なれど同じ物事今再び、言ひたりて何の妨げがあるべき。思ひしこそ言はずば、心やりがたし。もさより筆に任せてのしわざ、傳ふべき文にもあらず他人が見るに足るものにも非ず。しかして冬枯の眺めは、その

四甲

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すすしげ程こそ、世のあはれも、人のこひしさ。人の、仰せられしこそ、げにさるものなわあやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたたくか心ぼそからぬかは。六月の頃、あやしき家に、顔の白く見えて蚊やりくすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

註解 灌佛は、灌佛會の略、陰曆四月八日、即ち釋迦の誕生日に行ふ儀式、其像に甘茶を灌ぎかくるもの。●祭の頃は、四月の中の酉の日に行はるる賀茂の祭禮の時分。●あやめふく頃は、五月五日の節句の時分。ふくは、星根こさすを云ふ。

●早苗は、苗代の稲の苗。●水鶏は、涉禽類に屬する鳥、嘴長く其基部に軟皮を被る。足は長くして趾は自在に、よく水邊に栖む。鳴く聲、恰も戸をたたくに似たるより、歌などに其鳴くをたたくと詠む。●あやしき家は、賤しき家。●夕顔は、花は夕に開き、朝にしぼむ、果實は「かんべう」を製す。●六月祓は、六月の晦日に行はるる大祓。

七夕祭るこそ、なまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど早稲刈り乾すなど、とり集めたることは、秋のみぞ多かる。又、野分の朝こそ、をかしけれ。言ひ續くれば、みな、源氏物語、枕草紙などに、こ

情趣じやうしゆ 秋にゆづるまじ。水邊の草に紅葉もみぢのちりかかれるにおく霜しも白しろき朝あさ、ながし水みづから烟けむりの立つも面白おもしろし。年のくれに至いたり、人々ひとびとせわしがるも又ひさしほの風情ふうせいあり。興きようなきものさ人の眺ながめざる冬の月つきかげ、さえわたれる廿日はつかすぎの天あめ、見るからに淋さみし。御佛名ごぶつなや荷前のさきの御使者ごしや立たつ事の如ごときは、典雅てんがにして貴たかし。さまざままなる宮中みやちゆうの御儀式ごぎしき多く、正月ごしょうの御用意ごよういのせわしきに重かさなりて、御催ごそそしの事ことども、敬おこそ

なり。鬼おにやらひに引續ひきつづき、元朝げんてうの四方拜しやうほうらいの行おこなはるる。面白おもしろき事ことどもなり。除夜じゆやのいたくらきに松明たいまつつけ、夜中よなかすぎまで人の家いへを問とひまはり、何用なにようにや大聲おほいこゑにさわぎ、足あしも地ちにつかぬやうに急いそぎなるが、東あづまの方ほうの白しろうなを頃ときに至いたれば、さすがに静しづまりかへりたる、今年ことしもいと惜せしまれて心細こころこまし。死しせし人の來きたる今夜こんやさいひ傳つたへければ、靈祭れいさいの事ことありしも、方ほう今こん京都きんぎよにては廢すたれたり。東國とうこく地方ちほうに

四六
どふりにたれど、同じこと、また、今更いまさらにいはいじ
どにもあらず。思おもしき事こと言ことはぬは、腹はらふくるるわ
ざなれば、筆ふでにまかせつつあぢきなきすさびにて
かいやり棄すつべきものなれば、人ひとの見るべきにも
あらず。

註解 野分のわかは、晩秋ばんしゆうより初冬しよとうにかけて吹ふくあらし。●思おもしき事こと
は、おもひし事柄ことがら。●腹はらふくるるわざは、胸むねのつかへがさが
らぬこと云いふ義ぎ。●ことふりは、陳腐ちんぷへふるくさしなること。
さて、冬枯ふゆがれのけしきこそ、秋あきには、をさくある
まじけれ。汀なぎさの草くさに、紅葉もみぢの散ちりどごまりて、霜しも
いと白しろうおける朝あした、やり水みづより、煙けぶりの立たつこそ、

をかしけれ。年としのくれはてて、人ひとごごに急いそぎあへ
る頃ころぞ、又またなくあはれなる。すさまじきものにし
て、見る人ひともなき月の、寒さむけくすめる、廿日はつかあま
りの空そらこそ、心こころばそきものなれ。御佛名ごぶつな、荷前のさきの
使つかひたつなど、あはれにやんごとなき。公事くじども繁しげ
く、春はるのいそぎに取り重かさねて、催もよほし行おこなはるるさま
ぞ、いみじきや。追儼ついなより、四方拜しやうほうらいにつづくこそ
おもしろけれ。
晦つごもりの夜よ、いたう暗くらきに、松まつどもともして、
すぐるまで、人ひとの門かどたたき走はしり歩ありきて、何なに
かあらん、ことくしくののしりて、足あし

於ては、なほ執行はるる、殊勝しやうも思ひき。かくして元日の空そらになりゆくけしき、別に昨日けふに異なるべしとも見えざれど、彼のさうじしき事に思おもひ到いたれば、今更いまさらめづらしき感じす。大通おほどほりのありさま如何いかにさならば、何れいづの家にも祝いはひの門松かどまつたて連れ、春らしく賑にぎやかに、樂たのしげなるこそ何なによりも又また面白おもしろし。

どふが、曉方あかつまがたより、さすがに、音おとなくな、こそ、年のなごりも心こころほそけれ。なき人の來くとて、魂祭たままつるわざは、この頃ころ、都みやこにはなきを、あづまの方かたには、なほ、する事ことにてありしこそ、あはれなりしか。かくて、明けゆく空そらのけしき、昨日けふにかはりたりとは見えねど、引きかへて、珍めづしき心地こころぞする。大路おほぢのさま、松立まつたてわたして、花はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

註解　をさくば、おほかた。たいてい。●やり氷やりひは、遣水つみづと書しよす、ながしみづ。●御佛名ごぶつなは、十二月十九日より三日間みっかかん宮中みやちゆうに行はるる御佛事ごぶつじ。●荷前にぎまへの使つかひは、にさきの鴨鴨。古昔こせき、

年末ねんまつに十個所じゆくわの御陵ごりやう及び外戚がいせきの八墓はちぼへ幣帛へいひやくを奉たてまつられし公事こうじの使者ししや。●あはれ云いば、優雅いうがにして莊嚴さうげんなりとの義ぎ。●追儼おひげんは、おにやらひ。まめまき。●四方拜しやうほうはいは、三大節さんたいせつの一いち、一月いちげつ一日いちにちに行はるる宮中みやちゆうの御儀式ごぎしき。主上しゆじやうには當日たうじつ午前まへ五時ごじ三十分さんじふぶん御束帶ごちやくを着ちやくせられ、神嘉殿かみかだの前庭ぜんていに出御いでありて、神宮かみみやをはじめ、四方しやうほうの神々かみかみを遙はるかに拜はいし給ふもの。昔むかしは寅とらの刻くわくに清涼殿せいりやうだんの東庭とうていに出御いでありき。●松まつどもともしては、たいまつ(松明)つけて。●こころしくのしりては、たいそう騒さわいで。●足を空そらに云いは、足あしも地ちにつかね様やうに急いそいで。●さすむにはさは言いふものの。●なき人は、死しにうせし人ひと。亡人なきひと。●あづまの方は、東國とうこく。靈祭れいさいは、古代こわいは七月しちげつ十四日じゆしよ即ち盆ぼんの外ほか、十月じゆげつ晦日つごひにも行はれたるにて、東國とうこくにては今いまもまだ此この祭まつり。

がありしとなり。●花やかに、春しく賑かに。

●第二十段

何ぞか云ふ僧が「此世の中に家累なき身の上にも四季のうつりゆく空のけしきだけは、名残惜しい」と云ひけるが、實にさうも思はるべし。

○第二十段 何某とかいひし世捨人の

何某とかいひし世捨人の、「この世のほだしもたらぬ身に、ただ、空の名残のみぞ惜しき」といひしこそ、まことに、然もおぼえぬべけれ。

註解 世捨人は、しゆつけ。桑門。●ほだしは、手あしまさひ妻于眷族。家累。●もたらぬは、持ちて有らぬ。またい。●空の名残は、春夏秋冬のうつりゆく空のけしき。即ち、花紅葉に心さまるこの義。

●第二十一段

さまざまの憂事は、月に對す

○第二十一段 萬の事は

萬の事は、月見るにこそ、慰むものなれ。ある人

れば、心をたのしますものなりと、或人の言へるが如く「月ほど趣味深きものはあるまじ」又他の一人は「露が風情多し」と反對せるは興あり。

の、「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、又、一人、「露こそあはれなれ」と、争ひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かは、あはれならざらん。

その時に當れば、何によらず情趣なしとせず。

註解 月ばかりは、月ほど云ふ義。●あはれならざらんは美的趣味ならぬものは無しとの意。

月や花はいふに及ばず、風といふものこそ人の心にあはれを感じしむる様なり。岩にせかれて激する清流のながめ、時節を問はず面白し。沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時といふ詩を讀みしが、極めて面

月花は更なり、風のみこそ、人に、心は付くめれ岩にくだけて、清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。『沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとどまること少時もせず』と、いへる詩を見待りしこそ、あはれなりしか。嵇康も、山

白く感じぬ。竹林七賢の一人
なる嵇康も山林や澤邊に逍遙
して、遊魚をり、鳴禽を聞き
心たのし言へり。水草清ら
けきあたりに遊ぶほど、愉快
なるものはなかるべし。

●第二十二段
すべての物事、いにしへこそ

懐かし。當世風は、きばめて
卑しく成りゆくやうなり。指
物師の作れる美麗なる道具も
古代のもの形か遙かに面白
く見ゆ。手紙の言葉なども、
むかしの書損じにも美しさが
窺はるる。
常にいふ言葉も、残念ながら
卑しくなりゆけり。昔は「車
もたげよ」「火かかけ」と言
ひしを當世の人々は「もてあ
げよ」「かきあげ」と云ふ。
主殿寮の「人数たて」と言ふ
べき苦なるを「たちあかしし

澤に遊びて、魚鳥を見れば、心たのしぶといへり
人遠く、水草清きところにさまよひありたるばかり、心慰むることはあらじ。

註解 時をわかすは、四季の區別なく。●沅湘日夜は、唐人の
戴叔倫の湘南即事の一節、虚橋花開楓葉衰。出門何處望三京
師。沅湘日夜東流去。不爲三愁人住少時。虚橋は、枇杷。
沅湘は二川の名。●嵇康は、竹林七賢の一人。●人遠くは、
俗事の到らぬこと。●さまよひは、逍遙すること。散步。又
現前の境を離れたる高遠なる境に思想を馳すること。●あら
じは、あるまい。

●第二十二段 何事もふるき世のみぞ
何事も、ふるき世のみぞ、したはしき。今様は、

むげにいやしくこそ、なりゆくめれ。かの木の道
のたくみの作れる、美しき器物も、古代のすがた
こそ、をかしく見ゆれ。文のことばなどぞ、昔の
反古ごもはいみじき。

註解 今様は、當世風。●むげ(無下)は、大いに。いたく。●
木の道のたくみは、大工。工匠。●文のことばは、消息文の
文句。●昔の反古は、むかしの一寸書きすてしもの。所謂古
人の斷翰零墨なり。

ただ言ふことばも、口惜しうこそ、なりもて行く
なれ。いにしへは、『車もたげよ』、『火かかけ』
と、こそいひしを、今様の人は、『もてあげよ』

るくせよ」と言ひ、最勝講の御聽聞所なるをば「御講の廬」といはずして「講廬」と言ふが如き、苦々しき事と或老人は申されたり。

『かきあげよ』と、いふ。主殿寮の、『人數たて』と、いふべきを、『たちあかしろくせよ』と、いひ、最勝講の御聽聞所なるをば、『御講の廬』と、こそいふを、『講廬』と、いふ、口惜しとぞふるき人は仰せられし。

註解 主殿寮は、古昔、宮内省の被管に屬せし寮、供御・輿登其他殿庭・洒掃・燈燭・庭燎などの事を掌りしもの。現時は宮内大臣の統轄に屬し、宮殿・離宮及び其附屬物件並に鎖鑰・洒掃・鋪設に關する事務を管理し、兼て皇宮警察署を統轄する所。●人數立ては、たいまつ又は庭燎をたく時に、人數をそろゆる爲に命令する詞。●最勝講は、むかし天下安穩の修法として、五月の吉日を選ひ清涼殿にて、最勝王經を

講ぜられしこと。一條天皇の御宇に始まる。●たちあかしてろくせよは、人數立てよきは松明の事と心得たるを、立明し白くせよと下品にいふやうになりたりとの意。

●第二十三段

物事すたれし澆季の世とはいへ、今に至るも尙御所の神々しくも尊きありさま、世の風潮を受けず實にめでたし。五節の舞臺、主上の朝餉召すところ、其他何殿何門なご極めて莊嚴に聞かる。殿が家にもあるべき小葎、小板敷、高遣戸の如きも宮中なれば優美

○第二十三段 衰へたる末の世といへど

衰へたる末の世といへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世つかずめでたけれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき、小葎、小板敷、高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ。『陣の夜のまうけせよ』といふこそ、いみじけれ。よるのおどごのをば『かきあげよ』などいふ、まためでたし。上

に開ゆ。陣の座に灯をさもす
支度するを「陣の夜のまうけ
せよ」といふなる、上品なり
陛下の御寢所に灯の支度する
をば「かいこもし、さうせよ」
いふ如き、是れ亦雅なり。大
臣や中納言のやうなる公卿の
總奉行者が陣の座にて、其事
に當り居る有様はいふにや及
ぶ、百官の末までが、得意顔
をするも面白し。頗る寒氣つ
よき終夜、下役の人々そこ
こに居眠する、これもまたま
た面白し。内侍所の御鈴のひ

びき、しごやかなるものなり
と徳大寺太政大臣は申され
り。

●第二十四段
齋宮の野宮にあたまは、
他に比するものなく優雅なる
ものと思ひぬ。佛經や佛陀を

五十六
卿の陣にて、事行へるさまは更なり、諸司の下人
どもの、したりがほになれたるも、をかし。さば
かり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶり居たる
こそ、をかしけれ。『内侍所の御鈴の音は、めで
たく優なるものなり』とぞ、徳大寺の太政大臣は
仰せられける。

註解 九重は、だいら。禁中、漢和共に云ふ語。韓愈の詩に、
「一封朝奏九重天」とあり。●神さびは、すこく尊く覺ゆる
こと。●露臺は、藻鹽草には、大極殿の昇殿をいふさ見ゆ。
宮中に於ける屋根の設けなきうてな。五節の舞臺を云ふことも
いふ。●朝餉は、陛下の朝の御膳。轉じて、その御膳を奉る

所。●小菰は、上半分の格子戸、今も多く神社佛閣に見受く
●小板敷は、椽の如き狭き板敷。●高遣戸は、高所に設けら
れし引戸。●陣は、諸卿のつくべき席。●夜のおごごは、陛
下の御寢所を申し奉る。●かいこもし、さうよは、燈火を急
げよとの義。●土卿の陣にては、大臣・大中納言等の公卿に
ての總奉行者が陣の座で。●したりがほは、得意顔。●内侍
所は、古昔、禁中の温明殿の一名、今の賢所にして、八咫
御鏡を安置する所。轉じて、八咫御鏡の稱。●徳大寺太政大
臣は、藤原實基公なり。

●第二十四段 齋宮の
齋宮の、宮野におはしますありさまこそ、やさし
くも、おもしろきことこの限どはおぼえしか、經

忌み、なかご、そめ紙など呼ぶも面白し。

そうじて神社は、まさに優雅なるものなり。年古りたる森のさま、見るも世の常ならぬに、美しき垣をめぐらし、柳に木綿かけたる等は、尊しといはで可るべき。さりわきて尊きは伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮なり。

佛など忌みて、なかご、そめ紙など、いふなるもをかし。

註解 齋宮は、古代、天子御即位の時毎に、伊勢の神宮に奉仕せしめられし未婚の内親王又は女王。いつきのみこ。●野宮は、齋宮の伊勢へゆき給ふ前に居らせらるる所。其址は、嵐山の邊（天龍寺の北）に存す。●なかごは、佛の忌詞。そめ紙は、經の忌詞。

すべて、神の社こそ、棄てがたく、なまめかしきものなれや。物舊りたる森のけしきも、ただならぬに、玉垣しわたして、柳に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢、賀

茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅の宮。

註解 木綿は、楮(かうぞ)のあま皮にて製したる紙又は布の稱。●伊勢は、伊勢大神宮。●賀茂は、上賀茂、下賀茂の二神社。共に官幣大社。●春日は、奈良に鎮座する官幣大社たる春日神社。●平野は、京都の衣笠村に鎮座の官幣大社たる平野神社。●住吉は、攝津の住吉村に鎮座する官幣大社。●三輪は、大和國磯城郡三輪町大字三輪に鎮座する官幣大社大神神社(おほみわじんしゃ)。●貴船は、山城國愛宕郡鞍馬村大字貴船に鎮座する官幣中社。●吉田は、京都の東山の北、神樂岡に鎮座する官幣中社。●大原野は、山城國乙訓郡大原野村大字大原野に鎮座する官幣中社。●松尾は、山城國葛野郡松

六〇
尾村大字上山田なる官幣大社。●梅宮は、葛野郡梅津村大字西梅津なる官幣中社。

第二十五段 飛鳥川の淵瀬

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、たのしみ、かなしみゆきかひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野良となり、變らぬ住家は、人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰と共にか、昔を語らん。まして、見ぬ古のやんごとなかりけんあとのみぞ、いどはかなき。

註解 飛鳥川の淵瀬は、川は大和國高市郡に在り、むかし其淵瀬定まらざりしより、定めなき世の喻に引かれし語。●野良

は、良は接尾詞、野に同じ。のばら。●桃李の句は、桃李言はず春幾たびか暮る、煙霞跡なし昔誰か酒みし。その一聯に基づく。菅原文時の詩。

京極殿法成寺など見るこそ、志とごまり、事變

じにけるさまはあはれなれ。御堂殿のつくりみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、わが御族のみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼし置きし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとは、おぼしてんや。大門、金堂など近くまでありしかど、正和の頃、南門は焼けぬ。金堂は、その後、倒れふしたるままにて、とり立

第二十五段

飛鳥川のながれ、淵瀬の定まらざるに等しき此世なれば、時代かはり物事過ぎさり、樂しきこそ悲しきこそ、互にめぐり來、曾ては繁華なりし地も人住まぬ野となり、むかしながらの家には、主人かばりぬ。依然として桃李花咲くといへども物言はず、過去の事ども誰か語るべき。況んや

見し事なきむかしの貴き舊跡ばかりは、さりわきて果敢ものなり。

京極殿、法成寺などを見ればむかしの人の千古までも願ひし心はなほ存するも、その物事の變遷したるさまは、限りなき感傷をぞ與ふる。御堂關白道長の、等の寺院を建立せられ、多くの寺領さへ寄附し、自分が一家一族のみが攝政關白となりて天子の御後見なし、且つ國家を領護し、長へに榮華なれと思はれおきし

頃、たごひ如何なる世になる
とも、斯くも荒ればつべしと
は、なごて思ひ給はんや。大
門、金堂など近頃まで昔の
べれたるも、正和年間に南門
は焼けたり。金堂は其後倒れ
たるままに打ちすてちれ、再
建の工事も起らずしてやみ
り。ただ無量壽院のみは、其
時代の典型として今に尙残り
居れり。一丈六尺の佛が九體
見るからに尊く相並びておは
す。大納言藤原成行の書かれ
し額、大和守藤原兼行の筆の

蹟のこれる扉、鮮明に見ゆる
さま、又なき懐古の料たり。
法華堂の如きも、今尙存する
事なるべし。されど、此堂果
していつまでか存すべき。斯
様にしのげるべき物なき彼處
此處は、自然にすたれて柱石
のみ存するもあれども、その
昔知れる人もなし。ゆゑに、
何事によらず、自身の見るこ
と能はざる死後の世の物事ま
で、かれこれ豫定なり計畫
しておくは、頼むべからざる
拙劣の事なり。

つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたと
て残りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおは
します。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざ
やかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、未だ
侍るめり。これも又、いつまでかあらん。斯ばかり
の名残だになき所々は、おのづから、礎ばかり
残るもあれど、さだかに知れる人もなし。
註解 京極殿は、御堂關白道長の住みし所、舊址は上京區上
長者町の南に存す。東に法成寺あり、故に御堂殿とも云ひき
●法成寺は、道長の入道して住みし所。●御堂殿は、道長を
さして云ひし語。●莊園は、莊園とも書す。功臣權門等の

私有地。又、朝廷より皇子又諸臣に賜はりし田園。蓋し、此
にては寺領の義なり。●御族のみは、御一族ばかり。●うし
るみは、天子の後見即ち輔佐。攝政、關白を云ひしもの。
●大門は、總門。金堂は、本堂にして、道長の建立なり。●
正和は、花園帝の御宇。●無量壽院は、法成寺中にある阿彌
陀堂。●丈六は、一丈六尺のこゝ。●行成大納言は、藤原行
成にて、小野道風、藤原佐理と共に三人の能書家。世に三蹟
に云ふ。又、道風を除き、兼明親王を加へても云ふ。●兼行
は、後冷泉、後三條二朝の悠紀、主基の屏風をかきて有名
なる大和守藤原兼行なり。●あざやかに、鮮明に。●法華
堂は、法華三昧堂。●さだかに、たしかに。
されば、よろづに、見ざらん世までを、思ひおき

てんこそ、はかなかるべけれ。
註解 見ざらん世は、死後の世。

●第二十六段

風もまだ吹いて散らざるに、
花の色香かほるが如く、人の
心も變じやすき世のならひ、
互に忘れまじと誓ひしこそば
今に尙記してゐながら、自分
の世界の外に別れ／＼になり
ゆくは、死別よりも一入かな
し。故に、古人は白き絲のい
なる色にも染まる事を歎き、
路の幾條にもわかれ、違ひし
方面へ向ふをも悲しめり。堀

○第二十六段 風も吹きあへず

風も吹きあへず、うつろふ人の心の花に、なれに
し年月を思へば、あはれと聞きしことのはごと
に忘られぬものから、わが世の外になりゆくなら
ひこそ、なき人の別よりもまさりて、悲しきものな
れ。されば、白き絲の染まんことを悲み、道の巷
の岐れんことを歎く人もありけんかし。堀川院百
首の歌の中に。

昔見しいもがかきねはあれにけり

つばなまじりのすみれのみして

さびしき景色、さること侍りけん。

註解 うつろふは、かはる。古今集に「色見えてうつろふもの
は世の中の人の心の花にぞありける」とあり。●白き絲の句
は、墨子の「墨子練絲を見て之を泣く、其以て黄さすべく黒
さすべきが爲めなり」との語に基づくもの。●道の巷の句は
楊子に「塗路を見て之を哭す、其以て南すべく北すべきが爲
めなり」との語による。●堀川百首は、權大納言藤原公實の
歌集。●つばなは、茅花と書す。茅の若芽。

○第二十七段 御國讓

御國讓の節會行はれて、劍・璽・内侍所わたし奉
らるるほごこそ、限なう心ほそけれ。新院のおり

川百首の中に「昔見しいもが
垣根はあれにけりつばなまじ
りのすみれのみして」とあり。
もさ人の心のかはり易きを歎
きしもの、淋しき有様は斯く
もありなん。

●第二十七段

御讓位の儀式執行はせられ、
三種の神器を新帝へ御渡しあ
らせらるる時は、又なく御心

細き事なるべし。花園帝御位
をゆづらせられし春、「その
もりのさものみやつこよそに
して掃はぬ庭に花ぞちりし
く」よ、詠ませ給ひしよか傳
へたり。今の御代の朝廷の御
用の多きにまぎれ、新院の御
所の方へは何ふ人の少なきは
さびしう見ゆ。斯様な
際し、勢力につく人の心浮
薄のほごもありくさ知らる
べし。

あさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。
どのもりのさものみやつこよそにして

掃はぬ庭に花ぞちりしく

今の世のこと繁きにまぎれて、院には參る人もな
きぞ、さびしげなる。かかる折にぞ、人の心もあ
らはれぬべき。

註解 御國讓は、御讓位。●内侍所は、八咫御鏡。●新院は、
花園天皇。おりのあさせは、御讓位させられての御隱居。●さ
のもり(殿守)は、主殿寮のこと。さものみやつこ(伴の造)は
主殿寮の小役人。よそにしては、捨ておきてさ云ふ程の意。
●今の世は、當代即ち新帝の御代。

○第二十八段 諒闇の年

諒闇の年ばかり、あはれなる事はあらし。倚廬の
御所のさまなど、板敷をさげ、蘆の御簾をかけて
布の帽額あらしく、御調度ごもおろそかに、
みな人の装束、太刀、平緒まで、異様なるぞゆゆ
しき。

註解 諒闇は、天子崩じ給ひて臣民一般の喪に居ること。みも
のおもひ。●倚廬は、喪中(もちゆう)に籠り居る假家。●布
の帽額は、あらしき布を鼠色に染め、御簾の上邊に横さまに張
るもの。●おろそかは、そまつ(粗末)。●装束は、諒闇中の
装束は鈍色にして、太刀は黒作りにて銀金具なり、又平緒は
太刀にさぐる緒、無紋鈍色を例さす。●異様は、ことさま。

●第二十八段

天子崩御したまひ、臣民一般
喪にたる年ほど、物悲しき事
はなし。倚廬の御所は如何に
さならば、板敷を低くし、蘆
の御簾をかけおろし、日
帽額を施し、御道具の如きも
粗末に、萬人の身なり太刀、
さては其緒まで平生さこな
るさま、何から何までつつし
めり。

●第二十九段

心おちつけて考へ見れば萬事
みな過去の、こども打ちし
ばれて詮すなき。人のれし
づまりて後夜長の心やりに、
手道具などそれ、取片付け
残すまじと思ふ反古を破りす
つる中に、故人さなれる人の
習字や、いたづら書の繪など
見出したる時は、尙その當時
のおもひせらる。現存の人に
して程の、これは如何

變りたる體。

●第二十九段

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしきの
みぞ、せん方なき、人静まりて後、長き夜のすさ
びに、何ぞなき具足とりしたため、残し置かじと
思ふ反古など、やり棄つる中に、亡人の、手なら
ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、ただそ
の折のこゝちすれ。この頃ある人の文だに、久し
くなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふ
は、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心
なく、かはらず久しき、いと悲し。

なる時、如何なる年に受けし
手紙かと思ひめぐらせば、い
と懐し。故人の手澤残れる道
具の如きも、其人の形見の品
ながら無心に、むかしのまま
に存する、最も悲し。

●第三十段

人の死に失せしあまほご心傷
ましむるはなし。四十九日の
そが間、山寺などへ移り居り
の便利わるく、しかも狭き所
に多人數相會し、その死者の
ために追善をなす、心せわし
かれこれする間に一七日二七

註解 すさびは、遊び。なぐさみ。●具足は、だうぐ。さりし
たためば、それ、取片付くること。●やり捨つは、破りす
つ。●手馴れし具足は、亡人の久しく持ち馴れたる所の道具
遺愛品。●心なくは、道具の無心なるを云ひし語。

○第三十段 人のなきあと

人のなきあとばかり、悲しきはなし。中陰のほど
山里などにうつろひて、便あしく、せばき所に、
あまた相居て、後のわざごも營みあへる、心あわ
ただし。日數の早く過ぐるほど、ものにも似ぬ
はての日は、いと情なう、互にいふ事もなく、わ
れ賢げに、物ひきしたため、散々に行きあかれぬ

日さ日の経過の早き、譬ふるに物なし。四十九日目の日は實になさげなくなり、誰も彼も自身に利口ぶり、手道具引きまごめ、おもひ思ひに散り別れぬ。元の家に歸りつかんさき、一入心傷ましむること多かるべし。かやうくなる事は嗚呼おそろし、あさの人々の爲に縁起悪きゆゑ言ふは不可なりと言ふを見れば、現在眼のさきに無常を見て居るのに、何故忌詞などを嫌ふかと思はれ、人の心なるもの

もとの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかくの事は、あなかしこ、跡のため忌むことぞなごいへるこそ、かばかりの中に、何かはと人の心は、なほうたておぼゆれ。

註解 中陰は、人の死後、四十九日間の稱。●後のわざ云云は死者の追善を營むこと。即ち、冥福を祈るを云ふ。●ものにも似ねは、一七日、二七日三七日さ日のたつ事喻へやうもなしとの義。●はての日は、死後四十九日目の日。●物ひきしたためは、あまた相居し人々が利口げに所持品取纏め。●あかれぬは、別れてしまふ。●しかくの事は、こんな事共は不吉のこと故、もう云ふまい、あなかしこおそろしいとの義。●跡のためは、残りし人のため。●うたては、いむべし

は、やはり、薄情なるかき推せられて嫌はし。歲月たつも、決して忘れざれども「去るものは日に疎し」の世のさが也しかし、その死別の時程悲しく思はぬにや、益なき事語りて笑ひ興するこそあり。死骸は人氣まれる淋しき山中に埋め、まゐるべき忌日命日にのみ來り見れば、幾程もなきに卒塔婆には若生じ、落葉に没し、夕の嵐、夜の月のみ音なふにて他に参詣する人は無し。さる

歲月経ても、つゆ忘るるにはあらねど、去るものは、日々に疎しといへることなれば、然はいへどそのきはばかりは、おぼえぬにや。よしなしことなごいひて、うちも笑ひぬ。骸は、けうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり、まうでつつ見れば、程なく、卒都婆も若蒸し、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こと訪ふよすがなりける。

註解 去るものは、日々に疎しは、古詩に「去者日以疎。來者日以親」の句に基づけり。平素は親密なるも、去て他處に往く

にても、むかし思ひ出で懐かしがる人のある程は、さきさき弔ひもすべきが、其人も死に只僅かに先祖の墓所のみを聞き傳ふる子孫に至らば、悲しさへ思はざるに至らん。そして、死後のさぶらひ絶えはつれば、墓のみありて其主は何處の人なるか、名さへ知るによしなし。毎年春來るたびに、小草もえいづるを見人情にふかき人々は哀れはかなきものと思はんも、終には田風に音たてし墓畔の松の樹

も、千年をへぬまに伐りて薪にせられ、古墳のありし所はすき起されて耕地さかばる。その昔の面影さへ留めぬまことに歎すべし。

七二
さきは次第に疎遠になるを云ふ。蓋し、此處にては、去は死をいひしもの。來は生をいふ。●そのきはばかりは、きはは際なり、その當時はこの義。●けうさきは、人氣のなき物淋しい。●さるべき日は、忌日。●まうでは、詣の字を用ふ。さんけい。●卒那婆は、梵語、高く顯はる義、廟又は方墳と譯す。墓標として石などを高く積みあげたるもの又は木標などの稱。現時は上部の塔形を成したる細長き板に、經文又は梵字をしるせるものにて、墓の後に立つるを例さす。塔婆。●ここ訪ふは、おさづるを云ふ、よすがは、たよりよるべ。

思ひ出でて、しのぶ人あらんほごこそあらめ、そも又、ほごなく失せて、聞き傳ふるばかりの末々
は、あはれどやは思ふ。さるは、跡訪ふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人は、あはれども見るべきを、はては、嵐にむせびし松も、千歳を待たで薪に摧かれ、ふるき墳は、鋤かれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ、かなしき。

註解 しのぶは、多く偲の字を使用すれど、忍の字をもあてたり。したふ。思ふ。●跡訪ふわざは、死者の跡を弔ふ事。●いづれの人云々は、全く白樂天の「古墓何代人。不知三姓與」名。化爲三路上土。年々春草生」に基づけるもの。●ふるき墳の出典は、古詩に「郭門を出でて直に視れば、但見る丘と墳

十四
この古墓は犁かれて田を爲り、松柏は摧けて薪を爲る。白楊
悲風多く、蕭々として人を愁殺す。この一篇なり。

第三十一段 雪のおもしろう降り
たりし朝

●第三十一段
雪景の奇しき朝、人の許に用
ありて手紙やり、雪の事は何
一つ言はざりし返事に「今朝
の面白き雪の眺めを如何に見
るぞ、ただ一言筆にせられぬ
不風流なる御方の仰せ、何ぞ
て承知せらるべき。くれぐれ
も恨めしき御心中なり」とあ
りしは、面白かりき。けれど
も故人となりたれば、是位の

雪の、おもしろう降りたりし朝、人のがりいふべ
き事ありて、文をやるまで、雪のこと、何ともい
はざりし返事に、「この雪、いかゞ見ると、一筆
のたまはせぬ程の、ひがくしからん人の、仰せ
らるること、聞き入るべきかは。かへすくも口
惜しき御心なり」と、いひたりしこそ、をかしか
りしか。今は、なき人なれば、かばかりのこととも

些事なれども、今に尙おもひ
出でやすし。

忘れ難し。

註解 人のがりは、人の許。●ひがく(僻々)は、面白う雪の
降るを筆にせざりし事を、やや恨み咎めし語。不風流、いぢ
わる、不道理などにも解せらるべし。●をかしかりしがは、
面白かつたこと云ふこと。●かばかりのこととは、これ位の
寸さした事にて。

第三十二段 九月二十日の頃

●第三十二段
頃は九月二十日、或貴人の御
さそひ受け、夜明まで月弄び
て逍遙したりしが、その貴人
寄るべき家思ひいだされ、御
訪ひになりぬ。淋びれし庭に
は露の玉しきて床しきに殊更

くたわつ
九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明く
るまで、月見ありきしこと侍りしに、思しいづる
所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭
の露しげきに、わざとならぬにほひ、しめやかに

ならぬ香のほひ、いづくもなく漂ひきたれる、いと優雅なり。やや程たち、貴人は出で来られしも、有様はだかく思はれ、物かげよりひそかに窺ひしに、主人は妻戸を今すこし明けて、月見るやうすなり。客人の歸るさすぐ、室内へかけ込まば如何に残念なるべき。又、客の歸るを見送りたるのに、人が蔭より見ることを何として之を知るべき。斯の如き事は常々のたしなみの如何による事なり。その人

程もなう、死せりと聞きたり

●第三十三段
現今の御所の御譜請成り故實にくはしき人々に拜見させられしに、みな非難の個所なしとて、最早主上の御遷り迫り

打薫りて、しのびたるけはひ、いと物哀れなり。よきほどにて、出で給ひぬれど、なほ、こと様の優におぼえて、物のかくれより、しばし見わたるに、妻戸を、今すこし推しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らむ。かやうのことは、ただ、朝夕の心づかひによるべしその人、程なく失せにけりと聞き侍りし。
註解 誘はれ奉りては、兼好自身か、さる貴人より誘引せられしにより奉の字を使ひしなり。●思しいづるは、おもひだす●わざさならぬにほひは、客の爲に殊更に焚きしにあらざる

香のほひ。即ち、いつも焚きしむる空煙の香。●しめやかは、しつさり。香の床しく薫る貌に云ふ。●しのびたるけはひは、世を逃れ居るおもむき。●この様は、ありさま。猶ほその家を辭し去りてもまだ。●妻戸は、簾の戸にして、一枚の舞戸なるもの。主客共に出入する所。●月見るけしきは、月を眺むるやうす。●やがては、すぐの義。頓の字又は聽の字を用ふ。●心づかひは、たしなみ。注意。●失せは、死ぬること。

○第三十三段 今の内裏つくり去られて今の内裏つくり去られて、有職の人々に見せられるに、いづくも難なしとて、既に、遷幸の日、近くなりけるに、玄輝門院、御覽じて、『閑院殿

たる時、玄輝門院御覽になり
閑院殿の櫛形の穴は、圓くし
て縁もなかりき。と仰せられ
たる、いたく感心しけり。こ
れは、葉の入りて木の縁を施
したるは誤り故、法に合ふや
うになほされたり。

●第三十四段
甲香は、法螺貝に似たれど、

七八
の櫛形の穴は、まろく、ふちもなくぞありし
と、仰せられける、いみじかりけり。これは、葉
の入りて、木にて縁をしたりければ、あやまりに
て、直されにけり。

註解 今の内裏は、當時の皇居、冷泉萬里小路にありたり。●
有職は、既に解釋しおけり。●難は、まうしぶん、ひなん
●遷幸は、陛下のおうつり。●玄輝門院は、伏見天皇の御生
母。門院は、陛下御生母の尊稱。●閑院殿は、御殿の一。●
櫛形の穴は、壁に櫛形にあけたる出入口。くわさうぐち（火
燈口）。●葉の入りては、木瓜のやうに中くぼみになりて。

○第三十四段 甲香は
甲香は、ほらがひのやうなるが、小さくて、口の

その形小にして口の方は細長
く突出でし貝の蓋なり。武州
金澤の浦に産す。名を問へば
土地の人々は、「へたなり」
と呼ぶ由答へぬ。

●第三十五段
筆拙なき人の、無遠慮に手紙
かくは可し。おのれの文字拙
なりさて、他人に代筆さする
は、いさばしき事なり。

程の細長にして、出でたる貝のふたなり。武藏國
金澤といふ浦にありしを、所のもものは、「へたな
り」と申し侍るとぞいひし。

註解 甲香は、貝香とも書す、「へたなり」と云ふ貝の蓋。●
金澤は、武藏國久良岐郡の一村、金澤文庫址に八景にて名
高き所。横濱より三里餘。

○第三十五段 手のわるき人の
手のわるき人の、はばかりらず、文書きちらすはよ
し。見ぐるしとて、人に書かするはうるさし。

註解 手のわるき人の、文字のへたなる人の。拙筆の人の。
●文は、手紙。●うるさしは、いさばし。

●第三十六段

長き間ぶさたした時、如何に恨むべきかき、自分の怠り今更に思はれ、言葉に困つて居るのに、女の方より「下男一人居ば貸して下さい」と言ひ越したは、珍らしくも嬉しきものなり。女は斯様な心柄の人こそ善しと、或人の申されけるが、實に斯くありたきものなり。

○第三十六段

久しくおとづれぬ頃、いかばかり怨むらんと、わがおこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、「仕丁やある、ひとり」など、言ひおこせたるこそ、ありがたく嬉しけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の、申し侍りし、さもあるべきことなり。

註解

おこたりは、怠慢、ぶさた。通ふ事のでえしを軽く言ひし語。●仕丁は、こもの。しもべの義。正しくは、古昔、役(ぶやく)によりて使はれたるよぼる。即ち、丁男。又、古昔、主殿寮に附屬して、禁中の掃除などの雑役に服せし者の

●第三十七段

常に心おきなく親しみし人の何か儀式張れる事ある頃、自分に遠慮し、今更禮儀正しくするさまに見ゆるをば、さまで爲すとも言ふ人あるべきも、場所が場所ゆゑ、如何にも然うなくては叶はず、賢良なる人士なりと思はる。いつも心やせくせざる人の、隔心

●ひ。ひ。ひ。一人貸してまこの略言。●ありがたくは、かたじけなしとは解せて、斯様な事は有るこさまれに、奇特なごを見るぞよろし。

○第三十七段

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、われに心おき、引きつくるへたるさまに見ゆるこそ、今更、かくやはなど、いふ人もありぬべけれど、なほ、げにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。うどき人の、打解けたることなどいひたる、また、よしと思ひつきぬべし。

註解

ともある時は、儀式ばれる時分。何事がある時。●心お

なく物言ひかけたるなど、是も亦良き人と思ひつくなるべし。

●第三十八段

名譽や利慾のために心を勞し安靜を得るひまもなくして一生涯、くるしみ終るぞ愚の至りなり。財貨多き時は身を守るに賢しく、却て禍害を招きなどする媒介となる。死後に黄金をつみかさね、北斗星に

達する程になるとも、子孫のために遺産分配上などにつき種々の争ひ起るべし。愚者の見てうれしがる事、また無益なり。大車、肥馬に施す金銀珠玉の飾、識者の眼よりすれば、甚だ愚なりとすべし。げに、黄金は山にして、珠玉は淵に投すべきなり。利慾の爲に心をみだすは、愚人なり。後世にまで残る名聲こそ願はしき事なり。高位の貴人のみを、まされる人と言うてよかるべき、決して言ふ可らざる

八二
きは、遠慮すること。●引きつくるへるさまは、儀式ばるさま。行儀を正すさま。●げにげにしくは、如何にも然うなくてはならぬと云ふ程の意。●良き人は、身分よき人とも解さるべきも此處にては、賢明又は賢良なる人士としたし。●うまき人の、親しく交際せぬ人。日ごろ疎遠の人。

○第三十八段 名利につかはれて

名利につかはれて、静かなる、いとまなく一生を苦むるこそ、おろかなれ。財多ければ、身を守るにまごし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後には、金をして北斗をささふども、人の爲にぞ、わづらはるべき。愚なる人の、目を喜

ばしむるたのしみ、又あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人は、うたて、おろかなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利にまごふは、おろかなる人なり。

註解

●名利につかはれては、名譽と利益との爲に身を勞して。●まごしは、まづし(貧)。●害、わづらひ共に不利益又は難儀を云ふ。文選に、「實を懐きて以て害を買はず、分は表を鎔りて以て累を招かず」とあり、害を買ひてかんの出處なり。●身の後は、死後、身後。白樂天の句に「身後堆金柱北斗。不如生前一樽酒」とあり。●あぢきなしは、益なし。●心あらん人は、道理をわきまへ居る人。識者。●金はの句

なり。愚にして物事に掛なる人も、名門に生れてよき運に逢へば、高位にのほりきめき、驕奢の程をつくすがあり世にまれなる聖人賢人にても自身に富貴をのぞまずして低き地位にたちもし、時を得ずして一生を終りたるものも亦少なしとせず。一途に高位高官を希望する人も、利慾に迷ふものに次ての愚者なり。智識と才能との二つにかぎり絶世の名譽を残したしと思ふも然思すれば之を好むは、世

八四
は、文選東都賦に「捐金於山、沈玉於淵」に基づく。うづもれぬ名を、ながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人どやはいふべき。おろかにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのほり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人、聖人、みづから、いやしき位に居り、時にあはずして止みぬるまた多し。ひとへに、高きつかさ、位を望むも、つぎに愚なり。
註解 うづもれぬ名をば、後世までも残る名譽を。●家に生れ時にあへば、愚にして萬事にすぐれぬ人も位高き家柄に生

のよき聞えを樂しむなり。稱揚する人も誹謗する人も、即ち褒貶する人共に長く世に生存するものにあらず、名譽を傳へきく人々も、また程なく身まかるべし。然らば、誰に恥ぢつ、誰れにか知られん事を望まんや。名譽のよきは、他日非難さるるの種なり死後に名譽残ることも、小しも益なし。斯かる事を望むものは、其次の愚者なり。しかし是非とも智識を得、賢者にならん云ふ人の爲に一言せん

れ、よき時勢にでくはずき。●賢人は、聖人につぐべき徳ある人。●聖人は、萬世の師と仰ぐべき智徳ある人、智徳最もすぐれて萬事に通達したる人。●高きつかさ、位は、高官高位●つぎには、利慾に迷ふ者の次にこの義。
○智恵と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきと、つらく思へば、また譽を愛するは、人の聞を喜ぶなり。譽むる人、そしる人、共に、世に止らず、傳へ聞かん人、また、速に去るべし誰をか恥ぢ、誰にか知らんことを願はん。譽はまた、そしりのもとなり。身の後の名残りて、更に益なし。これを願ふも、つぎにおろかなり。ただ

に、智恵がまちがふ事にもなれば偽となる。才智といふものは、情慾願望の増長せる結果なり。

人に習ひ自ら學びて知れるは眞實の智とは言ひがたし。さらば、智とは如何なるものか善も悪も是も非も、その歸着點は同一なり。さすれば、如何なるものを、善といふぞ。至人は、智も徳も功も名も無き故、誰か知り、誰か之を傳ふべき。これは、智徳を有して殊更にかくし、愚をよそほ

ふにあらす。元來、賢や愚、さては得や損と云ふ如き、淺果なる境遇に身をおかざる故なり。心を浮世の利害以上におくがためなり。迷ひに執着して、名譽利慾を欲するは、以上の如し。すべての事、何れも皆わるし。是非を云ふの價値なく、また希望するにも足らず。

し、しひて智をもとめ、賢を願ふ人の爲にいはいは、智恵出でては偽あり。才智は、煩惱の増長せるなり。

註解 人の聞きなば、世のきこえ。ぐわいふん。●身の後の名は、死後のきこえ。身後の名譽。晋書に「張翰心に任せて自適、當世に求めず。或人之に謂つて曰く、卿乃ち適て一時に糴にし、獨り身後の名を爲さざるや」と。翰曰く、我をして身後に名あらしめんよりは、即時一杯の酒に如かず。正しくこの句の出處なり。●智恵出でては偽ありは、老子の「大道廢有仁義、智恵出有仁義」の句に基づく。無理に智をもとめ、賢者たらん願ふ人々の爲に一言しやうものなら、智恵まらばふさ虚偽となるこの義。老子のは、上代にて大道行

はれ、人々何れも質樸なりしが、此道次第におさるへたれば仁義と名づくるもの出来たりとの論。こは老子が、儒教の仁義の教へは、天地自然の道にあらぬを譏れるもの。序なれば記す。●煩惱は、まよひ。无明 貪愛又は情慾願望のまよひ。

傳へ聞き、學びて知るは、まことの智にあらす。如何なるをか、智といふべき。可、不可は一條なり。いかなるをか、善といふ。まことの人は、智もなく徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ、徳をかくし、愚をまもるにはあらず。もとより、賢愚得失のさかひに居らざれ

欠

●第三十九段

ばなり。まよひの心こころをもちて、名利みやうりの要よをもとむるは、かくの如ごとし。萬事ばんじ、皆非みなひなり。いふに足たらず、願ねがふに足たらず。

八八

註解 可か、不可ふかは一い條じょうなりは、善ぜん惡あくも是ぜ非ひも可か否ひも歸き着ちやくする點てんは同じおなじの義ぎ。莊子さうじ齊物篇さいぶつへんに「善ぜん惡あく是非かふか不可ふか一いに歸きす」と見ゆ。●まことの人ひとは、道徳だうとくの極きよく致ちに造詣さうげいしたる人ひと。即すなはち、至人しじん。莊子さうじ逍遙篇せうぎょうへんに「至人しじん無な己こ、神人しんじん無な功こう、聖人せいじん無な名な」と見ゆ。●さかひ(境)は、賢愚けんぐ得失とくしつをかれこれ云いふ境遇きやうぐ。●名利みやうりの要よ、この「の要よ」の二字ふたご、有ある本ほんと無なき本ほんと二種ふたしゆあり。莊子さうじに「非ひ以て要よ名利みやうりとあり、要よは求もとむるなり、故ゆゑに「の要よ」は無なきがよし。●皆非みなひなりは萬事ばんじすべてわるい。

○第三十九段 ある人法然上人に

欠

な變りものは、人の妻になり
難しと云ひ、その親やる事を
承知せざりき。

●第四十一段

五月の節句、競馬を見にゆき
しが、自分の車の前面に賤し
き人立ち塞がりて見えぬによ
り、みな車をおり矢來近う進
みしも却て人多く、おし分け
ても入り難し。此時、向ふの
樽檀の木の股に僧が上りて見

べきにあらざとて、親、許さざりけり。

註解

入道は、佛門に入れる身分ある人。又、佛門に入るこゝ
轉じて、其人の自稱にも、剃髮者の自稱にも云ふ語。●かた
ちは、容貌。みめ。●言ひわたりは、よめに呉れよと申しこ
むこと。

○第四十一段 五月五日

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、
に雑人立ち隔てて、見えざりしかば、
りて、埒のきはに寄りたれど、ことに、
ちこみて、わけ入りぬべき、やうもな
折に、向ひなるあふちの木に、法師の

る者あり。そして眠り、落ちんとして目覺すこと數度なりこのさま見る人、淺はかなりさ輕蔑し「世に馬鹿もあるもの哉、彼の危險なる枝の上にて安心して眠り居るよ」と云ひたり。自分は忽ち心中にて「吾人が死ぬるは今來るか計られず、此事を忘却して競馬見て日にくらす、その馬鹿加減は彼の僧以上なり」と云ひしに、前に立つ人々「實に左様なり、此上馬鹿なるもの有るべき」と語りてふりむき、

のまたについで、もの見るあり。取りら、いたうねぶりて、落ちぬべき時に、こと、たびくになり。これを見る人、嘲て「世のしれものかな、かく危き枝の上、すき心ありてねぶるらんよ」といふに、わかふと思ひしままに、「われらが生死の到來ただ今にもやあらん。それを忘れて、もの見て日にくらすおろかなる事は、なほまさりたるものを」と、いひければ、前なる人ども、「まことに、さにごそ候ひけれ。最もおろかに候ふ」と、言ひてみな、後を見かへりて、「こゝへ入らせ給へ」とて、所

「いざ此處へ入り給へ」と、場所を譲りたり。これ程の道理、何人も心づくべきも、斯かる雑沓の地にて意外の事聞き、その人達の心にひしき當りたるものか。人は木竹と違つて情あるもの故、豈に物事に感ずること無くてよかるべき。

を去りて、呼び入れ侍りにき。斯程のことわり、誰かは、思ひ寄らざらんなれども、折柄の思ひがけぬ心地して、胸に當りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず。

註解 賀茂のくらべ馬は、京都の賀茂神社の祭典に執行はるる競馬。●雑人立ちば、自分の車の前に賤しき人立ちふさがり●埒は、馬場のかこひ。やらひ。柵。●あふち(棟)の木は、せんだんの木。●ついあるは、しやがんで(蹲る)居る。●いたうねぶりては、いたく眠りて。●嘲りあざみては、淺はかなりささげしみて。●しれものは、多く癡漢と書す。ばかもの。●やすき心は、安心しての義。●ふさは、不圖の字を用

ふ。たちまち。●生死の到来は、死のくること。生は無意味なり。●去りては、よげて。●斯程のことわりは、これしきの道理。●木石にあらればは、木石は情なきもの。人は木石の如き非情のものにあらざる故の義。鮑照の詩に「人非木石、豈無感」とあり。

○第四十二段 唐橋中將

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうやうたくる程に、鼻の中ふさがりて、息もいで難かりければ、さまざまにつくろひけれど、も、わづらはしくなりて、目、眉、額なども、はれまごひて、うち覆ひければ、ものも見えず、二

●第四十三段

唐橋中將の子の行雅僧都、經論聖教を學徒に授くる僧ありたり。皮膚のはれ上る持病あり、一年と年さるに隨ひ、鼻ふさがり息通はざるにまり、さまざまに治療せしも重くなり、目も眉も額もみな一面にあれに腫れ、眼は蔽は

れし故物見えす、二の舞の面に似て偏に恐ろしく、鬼の顔のやうに變じ、終には寺中の人にも會はず、一室にさぢこもり數多の年を送りしが、ますます重くなりて死したり。斯様な病氣も、世にあれば有るものか。

の舞の面のやうに見えけるが、ただおそろしく、鬼の顔になりて、後は、坊のうちの人も見えす籠り居て、年久しくありて、なほ、わづらはしくなりて、死にけり。かかる病もあることにこそ。

註解 唐橋中將は、參議中將源雅清卿。●僧都は、僧正につぐ僧官にして、大・少あり、共に正・權あり。●教相は、眞言宗にて、經論・聖教を學ぶこと。之を行ふを事相と云ふ。經論は、佛敎の經典。又、その中の大日經・法華經の類と俱舎論・淨土論の類と。聖敎は、佛敎を云ふ。●年のやうにたくる程には、一年と年さるにしたがひ。●つくろひは、れうち。治療。●はれまごひては、腫れ感ひてなり。甚しくふくれあがること。●二の舞の面は、二の舞は、安摩といふ

●第四十三段

春はるくれんさする時、よき日和ひよりの日に、風流なる家のおくまり、楠木うなぎも茂りてものさび、庭にわの面に散り萎しる落花らくわ、その儘ままに行きすぎ難がたくて入り見れば、南方みなもの格子かかしは皆閉みなとちて淋さみしきも、東方ひらさきの開戸ひらきどは程ほどよく明あきたり。簾すだれのやぶれ目めより覗のぞき見れば、容貌ようぼう清楚せいせいたる

○第四十三段 春のくれつ方

春はるのくれつ方かた、のどやかに艶えんなる空そらに、いやしからぬ家の奥おく深く、木きだちものふりて、庭にわに散りしをれたる花はな、見過みすし難がたきを、さし入りて見れば、南面みなもの格子かかし、みな下おろしてさびしげなるに、東あづまに向むきて、妻戸つまどのよきほどにあきたる、御簾みすのやぶれより見れば、かたち清きよげなる男おとこの、年とし二十はたばかりにて、うちとけたれど、心こころにくくのごやかなる

舞樂ぶがくの次に舞まふ滑稽こつげいの舞曲ぶきよく、その面めんは、色いろ赤あかくしておそろし
●坊ぼうのうちには、僧都そうづの居所きよしょ。●わづらはしくは、おもく。其その病氣びやうき篤あつく。

二十歳にじふさい前後ぜんごの男子おとこ、行儀ぎやうぎはくづしなむら、奥床おくゆかしままでおちつきすまし、机つくえの上に書物しよぶつ繡いりぞき居ゐれり。その人の素性すじやう問とひて見たかりき。

●第四十四段

賤いやしき住家すまかの竹編戸たけあみどの内うちより極めて若わかき男子おとこの小童伴こどもなひて出いでぬ。月の光ひかりりに色いろはたしかならざるも、美うつくしき狩衣かりぎぬに

○第四十四段 あやしの竹の編戸の中より

あやしの竹たけの編戸あみどの中なかより、いと若わかき男おとこの、月影つきかげに、色いろあひ定さだかならねど、つややかなる狩衣かりぎぬに、濃こき指貫さしぬき、いとゆるぎきたるさまにて、小せやかな

さまして、机つくえの上うへに、文ふみをくりひろげて見みたり。いかなる人ひとなりけん、たづね聞きかまほし。
註解 春はるのくれつ方は、つは助辭すけご、春はるの暮くれれ即すなはち暮春ぼしゆんの頃ころ。●艶えんなる空そらには、春はるのよき天氣てんきの日に。●南面みなもの格子かかしは、南みなむきに設まげられし格子戸かかしど。●妻戸つまどは、簾すだれの戸どにして、一枚いちまいの舞戸まひどなるもの。●うちとけ(打解うちと)たれどは、行儀ぎやうぎをたださぬけれど。●心こころにくくは、奥床おくゆかしく。●文ふみは、ほん。書物しよぶつ。

濃紫のぬばかまはき、仔細ある風にて彼方の田の中の小路を、稲の葉の露にぬれながら、行きつつ秘曲の笛を吹く外に面白しき聞く人もあるまじき思ひしのみか、その行先をも知りたく、跡につきゆけば、笛の手をさめて山に傍ひし寺の大門に入りたり。榻に長柄載せたる車見ると、京にてよりは一入目だつ思ひせり居あはす賤しき男に尋ねれば「これくの宮様の御越の時にて、たしか御佛事なるべし

九八
る童、一人を具して、遙かなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつ、わけ行くほど、笛をえならす吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらずと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに、惣門のある中に入りぬ。榻に立てる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しかくの宮のおはします頃にて、御佛事など候ふにや」といふ。

註解 あやしは、いやし、みぐるし。●狩衣は(もと鷹狩の時にもちぬし服)。古昔の官服、まるえりにして、袖にくくり

と答へたり。打ち見れば本堂の方に、僧侶たちが来居れり秋の夜寒の風に送らるる焼きしめし香のほひ、身にしむ思ひせらる。表座敷より本堂に通ずる廊下さほる侍婢の、袖や裾にてたつ風起たせまじき注意など、見る人なき田舎にもかかはらず、心を配りぬたり。

九九
の有るもの、之を着用する時は、必ず指貫の袴を用ぬ、裾を袴の外に出すを例とす。指貫は、裾を縁にて指し貫きふくらせて括るもの、平絹又は織物にて仕立て、色は一定せず。さしぬきのはかま。ぬばかま(奴袴)。●いとゆみづきは、わけあること。仔細あるらしい。●具しては、つれて。伴させて。●そぼちつつは、濡れながら。●總門は、そこがまへの正門。●大門。●榻は、車の轆の臺、腰掛の状をなす。榻車。●御堂の方に、法師ごも参りたり。夜寒の風にさそはれくる空たきものにはひも、身にしむ心地す寢殿より御堂の廊にかよふ女房の、追ひ風よういなご、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり

註解 空たきものは、空炷物、何所とも知れぬやうにくゆらす

ひびき物静かなり。京の空に
比すれば、雲のゆきかふ風情
も早くおもはれ、月の陰晴も
定まりなし。

●第四十五段

藤原公世卿の兄に當る良覺僧
正さいはれしは、甚だしく立
腹しやすき人なりき。寺側に
大なる榎ありしにより、世人
榎の僧正と呼びたり。斯かる
名不可なりとて、榎の伐られ
たり。その切株あるにちなみ
きりくひの僧正と呼びたり。
ますく怒り、切株をほりの
けたるに、その跡大きやかな
る池となりしに由り、堀池の
僧正と呼びたり。

る香。●御堂の廊は、佛を安置する堂へ通ふための廊下。●
女房は、古昔、禁中の官女。又貴族の家の侍女。此處にては
後段の解に當る。●追ひ風は、衣袖の動くによりて起る風。
よういは、追ひ風を起さぬ注意。
心のままに茂れる秋の野らは、置あまる露にうづ
もれて、蟲の音かごとがましく、やり水の音のど
かなり。都の空よりは、雲のゆききも、早きこと
ちして、月のはれくもること、さだめ難し。

註解 かごこがましくは、恨みかこつやうに。●のどかなりは
おちつきて静かなり。やり水も物静かに響くその義。●月の
はれくもるは、山嵐の氣象の變化甚しきを云ひし語。

○第四十五段 公世の二位の兄人に

公世の二位の兄人に、良覺僧正ときこえしは、極
めて腹あしき人なりけり。坊の側に、大きな榎
のありければ、人、榎の僧正とぞいひける。この
名、然るべからずとて、かの木を伐られにけり。
その根のありければ、きりくひの僧正といひけり。
愈々腹だちて、切りくひを掘り棄てたりければ、
その跡、大きな堀にてありければ、堀池の僧正
とぞいひける。

註解 公世の二位は、從二位侍藤原公世卿。●兄人は、「せ
ひま」の音便。●良覺僧正は、比叡山の大僧正。僧正
は、僧官の最上位にして太・正・權の三階ありて、大は太納言

に、正は中納言に、權は參議に准ぜられたり。推古帝の御宇に創定。●腹あしきは、怒りやすき。●坊の側は、寺のわききりくひは、きりかぶ(伐株)。

●第四十六段

柳原附近に、強盜法印と稱する僧ありき。幾度も強盜に遭ひしにより、此名をつけたりと云ふ。

●第四十七段

或人、清水寺へ參詣のとき、年よりの比丘尼と道づれせるが、其尼ゆく「くさめくさめ」云ふ。尼様、何をさ

○第四十六段 柳原の邊に

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。たびたび、強盜にあひたる故に、名をつけにけるとぞ。

註解 柳原は、京都の七條の烏丸あたりの地。

○第四十七段 ある人清水へ參りけるに

ある人、清水へ參りけるに、老いたる尼の、行きつれたりけるが、道すがら、「くさめくさめ」といひもて行きければ、「尼御前、何事を、かくは

のたまふぞ」と、いひけれども、いらへもせず、なほ、言ひ止まざりけるを、たびく問はれて、うち腹だちて、「やや、鼻びたる時、かくまじなはねば、死ぬるなりと申せば、やしなひ君の、比叡の山に、ちごにておはしますが、たゞいまもや鼻び給はんと思へば、かく申すぞかし」と、いひけり。ありがたき志なりけんかし。

註解 清水は、京都音羽山清水寺、きよみづは俗稱なり。●道すがらは、みちづれして行く途中。●くさめは、くしやみ。●御前は、すべて、古昔、婦人の名の下に添へし語、此處にては、敬稱の語。●いらへは、へんじ。返答。●鼻びたる時

やうに言ひ給ふか」と問へども返事せず、尙も言ひ續けたり。尼は幾度も問はれて立腹し「非常に、くさめしたる時、くさめくさめ」と言ひまじなはずば、死する」と云ふ諺あればなり。自分の養育しまゐらせる若君稚兒として比叡山に居らるる故、今頃は定めてくさめぞし給はん」と推量し、かくも申すなり」と打ち答へたり。主おもふ點まことに殊勝なる心がけと云ふべし。

は、くしやみしたる時分。ややは、よほどの義。ひびく、くしやみして止まぬ時、その子のくしやみ毎に、わきの人が「くしやみく」を合はせてまじなふさなり。我が九州邊にても「も一つく」を、まじなふ例あり。●やしなひ君は、自分が育てたる若君。●比叡の山は、延暦寺を云ふ。●ちこ(稚兒)は、寺院にて給仕に使ふ小童、行童。●ありがたきは世に有ること稀なる。●志は、こころがけ。

●第四十八段

光親卿、後鳥羽上皇の最勝講の奉行をつさめたる折、御目通りへ呼ばれ御膳を與へて食はしめられたり。光親卿はいろく食ひし上、その器を御

○第四十八段 光親卿

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御を出されて、くはせられけり。さて、食ひちらしたるついがさねを、御簾の中へさし入れて、まかり出でけり。女房「あなきたな

誰にとれとてか」など、申しあはれければ、有職のふるまひ、やんごとなき事なりと、かへすく感せさせ給ひけるごぞ。

註解 光親卿は、藤原氏にして正二位堀川の中納言と號し、按察使權中納言なり。●院は、後鳥羽院。●奉行は、上の命を奉じて行ふこと。又、その役、此處にては、最勝講の事をつとむる役。●供御は、後鳥羽院の御膳部。●ついがさね、(衝重)は、三方の一種、檜の白木にて造れる方形のをしきに臺を重ねたるもの。●女房は、女官。●有職のふるまひは、故實に精しき光親卿のなされかた。●かへすくは、かされく。くりかへして。●感せさせ云云は、院がいたく御賞めになりしこと。

簾の内に入れて退きたり。女官は「ああ、むさくろし、何人に取片付けよとの所爲か」など互に言ひあひしが、上皇はこれを聞き給ひ、故實家の爲すところ、天晴なりと繰返して、御歎賞になりしと云ふ

●第四十九段

老年に至り、佛教を修むべしと待つべからず。古き墓の主は昔は少年なりし人なり。意外にも病氣となり。俄かに死なんとするに際し、初めて少年時代に學問せざりし事を悔ゆるぞかし。心得違ふ云ふは外にもあらず、第一にすべき佛道修行をおくらし、後にすべき事を第一にし、一生を渡を送れるが口惜しきなり。死ねるにのぞみ、臍をかむとも争てか及ぶべき。

○第四十九段 老い來りて

老い來りて、はじめて、道を行せんと待つことなかれ。ふるき塚、多くはこれ、少年の人なり。はからざるに、病をうけて、忽に、この世を去らんとする時にこそ、はじめて、過ぎぬる方のあやまれることは知らるれ。あやまりといふは、他の事にあらず、速にすべきことをゆるくし、緩くすべき事をいそぎて、過ぎにしことのくやしきなり。その時、悔ゆとも、かひあらんや。

註解 道は、佛教。行ぜん、修行せん。ふるき塚は、ふるはか。古墳。古詩に「老來を待ちて方に道を學ぶ莫れ。古

人たるものは、たたく無常が身邊につきまゝひ居るを覺悟し、寸時までも忘れざるが肝要なり。さすれば、何として此世の名聞利慾を求むる心のけがれも淡く、佛の道を修行する心も、忠實にならざる事あらんや。

古昔のある高僧は、人來て御互の用向を話すさきその返事に「今し急用出來、もはや明日か今夜にさし迫れり」といひ、耳をおさへて其事をきかず、念佛しながらさうさう

墳多くは是れ少年の人とあり。此句の道は、學問をさせる語。古墳の主は昔は少年なりし人、故に學問は年若きうちにすべし。老年を待つてはならぬとの義。人はたゞ、無常の、身心に迫りぬることを心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。さらば、なごか、この世の濁りも薄く、佛道をつとむる心もまめやかならざらん。

註解 無常は、世上の有限なる物事の、生滅轉變して定めなきこと。はかなきこと。心にひしとかけては、しつかりき記憶して、肝に銘じて。世の濁りとは、名聞利慾を求むる心のけがれも。まめやか(實)は、忠實。

昔ありける聖は、人の來りて、自他の要事をいふ

本望の往生をせられたり、
禪林・因に書き傳へらる。心
戒さいふ高僧は、いたく此世
の果敢なき事を思ひ、物辭か
にひざまづくことさへなく、
平生中腰のみして居られた
り。

時、答へていはく、「今火急の用事ありて、既に
朝夕に迫れり」とて、耳をふたぎて念佛して、遂
に、往生を遂げけり、禪林の十因に侍り。心戒
といひけるひじりは、あまりに、この世のかりそ
めなる事を思ひて、しづかについぬける事だにな
く、常はうづくまりてのみぞありける。

註解 自他の要事は、自身及び他人の用事。●禪林の十因は、
永観律師の物されたる往生十因を云ふ。禪林は、禪宗の寺
院。此處にては、東山の永観堂のこと。律師は僧部に次ぐ僧
官。正・權あり。五位に准す。りし。●心戒は、高德の僧の
名。長明の發心集に「近く心戒坊さて、ゐごころも定めず
雲風にあさをまかせたるひじりあり」又「花園殿の御末さか

や、八島の大臣の子にして、宗親とて、阿波守になされし人
なりけり」云云。●つゝいゝは、跪坐すること。ひざまづくこ
と。●常ば云云は、いつも中腰ばかりして居られたことなり。

○第五十段 慶長の頃

慶長の頃、伊勢の國より、女の、鬼になりたるを
みて上りたりといふことありて、その頃、二十日
ばかり、日ごとに、京白川の人、鬼見にとて、出
でまごふ。「きのふは、西園寺に参りたりし、け
ふは院へ参るべし、ただ今はそこへ」など、
いひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そ
らごとといふ人もなし。上下ただ、鬼のこののみ

●第五十段

花園帝の慶長年間、伊勢よ
り女の鬼になりしを伴ひて上
京したりとの評判にて、その
時分、二十日ばかりは日日、
京白川の人々が、鬼見にゆく
ま云ひ、出であるけり。「昨
日は大臣の西園寺様にかが
へり。今日は上皇の御所へ伺
はん。今はどこそこに居る」

なご言ひあふ。たしかに見し

さ云ふ人もなく、虚言さ云ふ人もなし。上の人も下の人も鬼女の事のみ噂絶えず。その時分、東山より安居院附近へゆきしに、四條通りより上の方の人々、何れも北に向うてかけゆきつつ、一條室町に鬼居る騒ぐ。今出川邊より見たれば、上皇の御棧敷あるあたり、ゆき過ぐべくも覺えず、雑沓す。はじめより全く根なき鬼のうはさにあらざるべしと思ひ、人を遣して

言ひやます。

註解 慶長は、年號の名、元和の前、花園天皇の御宇。●ゐてのゐは、率の字を用ふべし。ひきゐて。つれて。●京白川は京都の白川、市の東なる地名。●出でまごふは、であるく。●院は、上皇の御所。●まさしくは、たしかに。●そらこそは、うそ。●上下ただは、上の人も下の人もみな。その頃、東山より安居院の邊へまかり侍りしに、四條より上さまの人、みな、北を指して走る。一條室町に鬼ありとののしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御さじきのあたり、更に通り得べくもあらず、たちこみたり。はやく、あどなき事

見せしに、大抵鬼に逢ひし言ふものなし。日ぐれまで騒ぎたて、あげくの果には喧嘩起り、驚き入りたる次第なれり。當時たいがいの人、二三日病氣にかかりしが、彼の鬼の評判は、この流行病の前兆と言ふ人もありたりき。

にはあらざんめりさて、人をやりて見るに、大かたあへるものなし。暮るるまで立ちさわぎて、はては、鬨諍おこりて、淺ましきことどもありけり。その頃、おしなべて、二日三日、人のわづらふ事侍りしをぞ、かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけりと、いふ人も侍りし。

註解 東山は、京都加茂川の東、南北にかけての地を云ふ。●ののしりは、わめきさわぐこと。●院の御さじきは、上皇の賀茂祭を御見物し給ふ棧敷。むかし、一條大路にありたり。●はやくよりは、最初から。元來。●鬨諍は、あらそひ。けんくわ。●わづらふは、病氣にかかる。このしるしは、大抵

の人々が病氣にかかる前兆

●第五十一段

龜山上皇の御殿の池に、大井の水を引かせらるるために、大井の人民に命じて、水車を造らせ給へり。數多の賃錢を下賜せられ、二三日の中に作りあげて装置せしも、少しも廻轉せざるゆゑ、かれこれ手入せしも、結局まはらず、何の役にもたざりき。さて此度は宇治の村民を呼び、水車を製作せしめしに、雑作もなうすませしが、意の如く廻

○第五十一段 龜山殿の御池に

かめやまどのみいけ おほるがは みづの 水をまかせられんとて おほるの 土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出して、かけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかく直しけれども、遂にまはらで、徒にたてりけり。さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、安らかにゆひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るること、めでたかりけり。よろづに、その道を知れるものは、やんごと

轉し、美事に水を汲み入れたり。何事によらず、斯道に精しきものは、尊くも感心のきはみなり。

なきものなり。

註解

龜山殿は、もご嵯峨院の別館、捨てて檀林寺となし給へり。後嵯峨天皇中興して龜山殿を營み給へり。龜山上皇も亦此に居給へり。事は、この上皇の御時なり。舊址は、今の天龍寺の地。●まかせは、引かせ。大井川は、普通に大堰に作る、嵐山の麓を流るる清流。●あしは、ぜに(錢)。●宇治は、地の名、宇治川にそひ、村人は水車の術又は水を引く事に長じたり。●大かたは、たいがい。大抵。又、少しもの義。●ゆひては、結ひて。組み立つること。●やんごとは、尊きこと。重んずべきこと。

●第五十二段

仁和寺の或僧、老年になるま

○第五十二段 仁和寺に

仁和寺に、ある法師、年よるまで、石清水を拜ま

石清水八幡宮へ参詣せざりし故、不本意のほど感じ、みちづれもなく一人、徒歩してまゐりたり。山下なる極樂寺にも高良にもまうで、最早これだけなりと思ひて歸れり。さて、知人に會ひ「日ごろの希望を遂げたり、噂にききしよりもまさり、莊嚴言はんやうなかりき。そも、参詣せし人々がみな山へ登りしは如何なる事ある故か、ゆきて見たかりしも、八幡宮へまゐるが目的ぞと思ひ、山までは

ざりければ、心うくおぼえて、ある時、思ひ立ちて、ただ一人、かちより詣でけり。極樂寺、高良など拜みて、かばかりにと心得へて歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ、思ひつる事、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに、山へ登りしは、何ごとかありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも、先達は、あらまほしきものなり。

註解 仁和寺は、葛野郡花園村大字御室に在る眞言宗の一寺也

欠

欠



●第五十四段

御室即ち仁和寺に、美しき稚
兒ありしを、何さかしてつれ
出し遊ぶべく工夫する僧達あ
りて、藝能を有する僧等を仲
間とし、俗ならぬ辨當のやう

●第五十四段

御室にいみじき兒

御室に、いみじき兒のありけるを、いかでさそひ
出して遊ばんと、たくむ法師ごもありて、能ある
あそび法師ごもかたらひて、風流の破籠やうのも
の、ねんごろに營み出でて、箱風情のものにした

すに。●びりは、もご(許)、醫師のうち。●あて。つれて。
率ゐての義。●異様は、かはりたるふう。へんなさま。●く
ぐもり聲は、判然させぬこもり聲。●枕がみは、まくらもご
●聞くらんこもおほえずは、足鼎の中で聞いて居ることも思へ
ぬ。●ただ力を立てては、ひたすら力を出して。●わらしべ
は、菓のしん。●缺げうけながらは、きれて肉は深くふぐれ
たなりに。●辛き命まうけては、やツまの事にて命ひるひて

なるもの、丹誠こらしてこし
らへ、之を箱の如き物に入れ
双岡の勝手まき地に埋め、上
より紅葉ふりまき、氣のつか
ぬ様にして、御室の御所へゆ
き、目的の稚兒をつれたした
り。僧達ばうれしくおもひ、
處々へあそびまはり、前を用
意しおける芝生の上に席かま
へ「いたく疲れたり。ああ、
紅葉をたき、酒煖むる風流人
はあらざるか、祈禱に靈驗を
あらはし得る僧達よ、祈りて
みられよ」互にいひ合ひ、

ため入れて、雙岡の便よき所に埋み置きて、紅
葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所
へ参りて、兒をそそのかし出でにけり。嬉しく思
ひて、こゝかしこに遊びめぐりて、ありつる苔の
席に並みゐて、「いたうこそ困じにたれ。あはれ
紅葉を焼かん人もがな。しるしあらん僧たち、祈
り試みられよ」など、いひしろひて、埋みたる木
の下に向きて、數珠おしすり、印こごとくし結
び出でなごして、いらなくふるまひて、木の葉を
かきのけたれど、つや／＼、物も見えず。所の違
ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山をあされど

埋めおきたる木の下にうち向
ひ、珠數もみ、眞言秘密の印
など仰山らしくむすび、さも
こごとくし業をなし、木の
葉かきのけたるも、一向に何
物もいで来らず。場所ちがひ
たるかさいひ、山中のかしこ
此處掘りて尋ねしも、遂に見
えざりき。埋めしを人の見定
めおき、御所へゆきしその跡
にて、取り去りたるなり。僧
達ば驚き入り物言はず、見苦
しきけんくわし、立腹して歸
りたり。非常に面白き事つく

も、なかりけり。うづみけるを、人の見置きて、
御所へ参りたるまに、盗めるなりけり。法師ごも
こののはなくて、聞きにくくいさかい、腹だちて
歸りにけり。あまりに、興あらんとすることは、
必ず、あいなきものなり。

註解 御室は、仁和寺の俗稱。●いみじき兒は、美しき子。
●いかでは、ごうかして。●能あるは、藝能ある。●破籠は
破子とも書す。内にしきりある一種の辨當箱。●れんごろは
ていねい。丹誠こらして。●箱風情は、箱のやうな。●雙岡は
比丘又は並岡にも作る。三箇の山より成り、仁和寺の附近に
在り。兼好法師も草庵を結びしこあり。二の岡の西麓に遺跡
ありさか傳ふ。●御所は、仁和寺を云ふ。宇多帝落飾の後

らんごする時は、えてして吃
度、興なき事に歸しやすし。

當寺に入りて宮殿を營み給ひしに由る。爾後法親王の宗務を
總轄せらるる所。●そのかしは、さそひだすこと。●苦の
席は、こげの生えし所。此にては芝生を解するが可なり。●
困じは、つかれ。くたびれ。●紅葉云は、白樂天が「林間
煖酒燒紅葉この句に基づく。風流の趣をのべしもの。その
いづべん
一篇をあげもせば「曾て大白峰前に住し。數仙遊寺裡に到り
きた。黒水澄む時潭底出で。白雲破るる處洞門開く。林間酒
を煖めて紅葉を燒き。石上詩を題して綠苔を拂ふ。惆悵す舊
遊復到る無く。菊花時節君が廻るを羨む。●しるしあらん
僧だちは、祈禱に靈驗を有する僧等。●印は、一種の術、眞
言宗の僧侶が、呪文を唱へて雙手を結ぶこと。●つやく。●
絶えて。一向に。さら。●あさるは、尋ねさがす。●あ。

いなし(愛無)は、おもしろみなし。興なし。

○第五十五段 家の造り様は

家の造り様は、夏をむねとすべし。冬は、いかな
る所にも住まる。暑き頃、わろき住居は堪へ難き
ことなり。
深き水は涼しげなし、淺くて流れたる、はるかに
涼し。こまかき物を見るに、やり戸は、蔀の間よ
りもあかし。天井の高きは、冬寒く、灯くらし。
造作は、用なき所を作りたる、見るもおも白く、
よろづの用にも立ちてよしとぞ。人のさだめあひ
侍りし。

●第五十五段

住宅の作りやうは、夏向を
專一とすべし。冬向はいかな
る場所にも住まるるなり暑き
時分、夏に適せざる家は、す
まんにも住みがたし。
深くたたへし水は、すすしみ
なし、淺くさらくさ流るる
もの、すぐれて涼し。ちさき
物を見るには蔀のある室より
も、やり戸のある室明かなり
天井の高きは冬季に寒く、燈

光は暗し。普請は、さして用なき所を作れる見るからに面白く、萬事につけての役にもたちて宜しき、或人も批評をされたり。

●第五十六段

ひさしぶりに會ひたる人の、自分の方に有りし事のみを續けさまに語るは厭はし。心おかね親しみ合ひし人にもせよ永の年月たちて面會する事、恥かしからぬ筈はなし。下等の人は、かりそめの外出にも

註解 むねごは、おも(主)。第一の義。●わろき住居は、夏向に適せぬ住家。●はるかには、立ちまさりて。すぐれて。大いに。●やり戸(遣戸)は、みぞへはめて左右へ送る戸。ひきご。●葎は、日よけ又は風雨を防ぐに用ゐし戸。●さだめあひは、批評。評論。

○第五十六段 久しく隔りて

久しく隔りて、逢ひたる人の、わが方(かた)にありつること數々に、残りなく語りつづくるこそ、あいなけれ。隔なく馴れぬる人も、程經て見るは、恥しからぬかは。

註解 久しく隔りては、ひさしぶりにて。●數々は、さまざまいろ／＼。●あいなければ、面白くなし。いさばし。●程經

歸れば今日(けふ)はしか／＼の面白き事ありきさて、息せきて語りたのしむものなり。上品なる人の話するには、數多(おほく)の人の中(なか)にて只一人に向ひていへど、自然(しぜん)とつりこまれて外の人も聞くやうなるなり。下等の人は相手(あひて)をえらばず、衆人中(あひて)にて今(いま)見る如く大袈裟(おほげさ)に物語るゆえ、一座(いざ)のものみな笑ひさわぎ、いさ亂(みだ)りがはし。面白き事(こと)いふも、さほどに面白(おもしろ)からぬぞ、面白(おもしろ)からぬ事(こと)ひても善く笑ふことにより、人

て見るは、時(とき)たちて面會(めんわい)するのは、次(つぎ)様の人は、あからさまに立ち出(い)でてでも、興(きょう)ありつる事(こと)とて、息(いき)もつきあへず、かたり興(きょう)するぞかし。よき人の物語(ものがたり)するは、人(ひと)あまたあれど、一人に向(むか)ひていふを、おのづから、人も聞(き)くにこそあれ。よからぬ人は、誰(たれ)ともなく、あまたの中(なか)にうち出(い)でて、見(み)ることのやうに語りなせば、みな、同じく笑(わら)ひのしる。いと亂(みだ)りがはし。

註解 次(つぎ)様の人は、品のよくない人は。下等(かどう)なる人物(じんぶつ)は。●あからさまは、かりそめ(假初)の義(ぎ)。●立出(たてい)でては、外出(がいしゅつ)しても。●よき人は、上品(じやうひん)なる人。●亂(みだ)りがはしは、みだりが

品はおして知らるべし。人の
姿の善悪、才智ある人は斯く
かくの事にて知らるるに評す
るに方り、才智に乏しきもの
は、自身の事を定規にして物
語る、きはめて聞きぐるし。

はし。

をかしき事をいひても、いたく興せぬと、興なき
事をいひてもよく笑ふにぞ、品のほごははかられ
ぬべき。人のみざまのよしあし、才ある人は、そ
の事など定めあへるに、おのが身に引きかけて言
ひ出でたる、いとわびし。

註解 品のほごは、人品のよしあし。●人のみざまは、人のふ
うつき。人のすがた。●いさわびしは、ひどく聞きにくい。

●第五十七段

人のなした歌話の、その本歌
の妙ならざるは、不本意なり
いささかにても歌の心得ある

○第五十七段 人の語り出でたる歌物語
人の語り出でたる歌物語の、歌のわるきこそ、本
意なけれ。少し、その道知らん人は、いみじと思

人は、その和歌をまじし思ひ
ては話すまじ。そうじて、十
分知らざる學藝の談話は、
をかしさに堪へず、聞きぐる
し。

ひては語らじ。すべて、いとも知らぬ物語、かた
はら痛く、聞きにくし。

註解 歌物語は、和歌についての談話。歌話。●いとも云云は
十分に心得て居らぬ學藝の話。●かたばら痛くは、をかしき
に堪へぬ。笑止でならぬ。

○第五十八段 道心あらば

「道心あらば、住む所にしもあらじ。家にあり、人
に交るども、後世を願はんに難かるべきかは」と
いふは、更に、後世知らぬ人なり。げには、この
世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何
の興ありてか、朝夕、君に仕へ、家を顧みるいと

●第五十八段

「菩提心あらば、別に住む所
にもよらざるべし。俗家に居
り俗人と交際しても、後生を
求むるに六かしき事のある苦
なし」といふは、全く後生を
云ふ事を知らざる人なり。ま
ことに浮世を悲観し、どうし

ても不生不滅の悟を得んと思ふならば、何の趣味ありてか毎日主君に仕へつ、家族を養ひ家事どもをするに、氣が進むべきぞ。人の心は見るにつけ、聞くにつけ、情實にほだされて變りやすきもの故、靜かにして身一つならざれば、佛道修行は出来がたし。今日の修行者の器量、むかしの修行者に及ばず、世をすて山中へかくれても、飢餓と嵐をしのぐ衣食あらざれば、生存おぼつかなければ、自然

に生活上の慾望起る如き事も時として無きにしもあらざるべし。併しそれでは、折角に世をすてし甲斐なし。それ程ならば、何故世を棄てたるぞなど言ふは、極めて不理窟なり。さはいふもの一度佛道を奉じて、世をのがれし人よし衣食の慾望ありさしても俗間に居り勢力多き人の貪慾深きさは、同日の論にあらず紙の衣具、麻布の衣服、一鉢の飯、あかまの汁にて事足る。この物に、如何ほどの費

なみの、勇ましからん。心は、縁にひかれて移るものなれば、しづかならねば、道は行じがたし。
註解 道心は、佛果を求むる心。ぼだいしん。●後世は、後の世。ごしやう(後生)。●はかなみは、はかなく思ふこと。●生死は、生・病・老・死の終始の稱。これを分段生死と變易生死に分つ。前者は、六道の衆生が、其果業により身壽に長短壽天ありて生死に流轉すること云ひ、後者は菩薩が分段生死を離れたれど、尙、迷悟の漸次推移すること云ふ。●出でんと思はんに、生死の境遇を出離せんと思ふならば。●いさなみ(營)は、わざ。仕事。●縁にひかれては、外界の事物又は情實に引きつけられて。●道は云云は、佛道は修行しにくい。

そのうつはもの、昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐をふせぐよすがなくては、あらぬわざなれば、自から、世をむさぼるに似たることも。便にふれば、なか無からん。さればとて、背ける甲斐なし。さばかりならば、なごかは棄てしなご言はんは、無下のことなり。さすがに、一たび、道に入りて、世をいとはん人、假令望ありども、勢ある人の貪欲多きに似るべからず紙のふすま、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざのあつもの、いくばくか、人のつひえをなさん。求むるところは易く、その心、はやく足りぬべし。か

用をか要すべき。されば僧の身は求むるものは容易く得、心には早速満足を與ふべし。僧は圓頂黒衣の手前あるにより、世に求むる所ありさ云ふも、悪事には遠ざかり、善事には接近することのみ多し。人と生れし以上は、何さかして此世のわづらひをさげ、静けき境遇に身をおきたきものなり。只管慾望を求むるのみに心を碎き、佛果を得ん心せすば、犬猫さ少しも違ふ所あらざるべし。

一三〇
たちに恥づる所もあれば、然はいへど、悪には疎く、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして、世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。偏に、貪ることをつとめて菩提におもむかざらんは、萬の畜類に、かはる所あるまじくや。

註解 そのうつものは、今の修業者の器量。●よすがは、たより。すべ。●あられぬわざは、居られぬ事。●背けるは、山林にのがれた。世に背いた。●なじかは、なにかは。いかでか。●無下は、つまたぬこの義。●道に入りては、佛道を奉じて。●紙のふすまは、紙の夜具。うすきふさんの義。

●鉢のまうげは、鉢は佛家の食器。一椀の飯。●あかざのあつもの(黎羹)は、黎のすひもの。粗食の義。●はやく足りぬべしは、其慾望は早速みたし得べしとの義。●かたちには僧たる圓頂黒衣の姿に。●悪には疎くは、不善の事には遠ざかり。●菩提は、無上の正道。無上の正覺。●かはる所はちがふ所。異なる點。

○第五十九段 大事を思ひたたん人は

大事を思ひたたん人は、さりがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら、棄つべきなり。暫しこの事はてて、同じくは、かの事さたしおきて、しかくの事、人の嘲りやあらん。ゆく

●第五十九段

生死の境を出離して菩提心をおこす人は、すて難く心にかかる本望を遂げずして、そのまま其事を棄つるぞよき。一寸この事をすましてのちさか同じくは彼の事を處理しての

ちさか、かやうくの事すて
おきては、世人の笑ふも計り
がたし、のちのちにつけ、彼
れ此れうしろゆび指されぬや
うに爲しおき、是迄も永年か
くして来れり。これ等の事の
片付くを待ち居るも、決して
ひまも有まじ、ゆるく佛道
に入らんなどと思はば、去り
がたき、用事のみ出来にでけ
てはてなく、終に遁世をおも
ひたつ日は来まじ。
そうじて人を見るに、いささ
か佛道に心ある身分のものば

一三二
末難なくしたためまうけて、年頃もあればこそあ
れ。その事待たんほどあらじ、物さわがしからぬ
やうになど思はんには、えさらぬ事のみ、いどど
重なりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日
もあるべからず。

註解 大事は、人間一生の大事とする佛道修業を云ふ。正しく
は、生死の二大事。●さりがたく(難去)。すてがたく。●さ
な。●らば、其儘。すぐさま。●難なく云は、人に彼れ是れ
非難されぬやうにしておき。●年頃云は、これ迄永年斯う
して来れりとの義。●えさらぬ(得去)事のみは、去ることの
出来ぬ事ばかり。

いづれも此豫定にて、一生を
送りはつ。近火如きをよくる
人は、暫く此事をなして後さ
いふべきか。一身を全うせん
とする爲には、恥辱をも問は
ず、財寶をも打ちすてて逃ぐ
るにあらずや。死は決して人
を待つやうなる事なし。人生
の無常は洪水や火事の急なる
よりも速かに、且つ防ぎがた
きを、その時に際し、老親や
小兒や、君のめぐみや人の愛
情、すて難しと言ひたりさ
て、争てか棄てずに居らるべ

おほやう、人を見るに、少し心ある際は、みな、
このあらましにてぞ、一期は過ぐめる。近き火な
ごに逃ぐる人は、しばしとやはいふ。身を助けん
どすれば、恥をも顧みず、財をも棄てて、逃れ去
るぞかし。命は、人を待つものかは。無常の來る
ことは、水火のせむるよりも速に、逃れ難きもの
を、その時、老いたる親、いとけなき子、君の恩
人の情、棄て難しとて棄てざらんや。

註解 おほやうは、たいてい。おほかた。●あらまは、心あ
て。むなづもり。豫定。●一期は、人の一生。●無常は、世
上の有限なる事物の生滅流轉して定めなきこと。はかなき。

●第六十段

仁和寺中の眞乗院に、盛親僧都と呼ぶ尊ぶべき智者住したり。里芋の根を好み、澤山食へり。法談の席にても大鉢にもりあげ、手近におき食しつ御経をもよみぬ。病氣の時分には、一週間なり二週間なり養生すべく一室にひきこもり、善き芋頭をえりて常に倍して食ひ、何病にてもなほし

一三四
●水火は、洪水と火災との義、無常の來る事の早く、且つ防ぐべからざるに喩へし語。

○第六十段 眞乗院に盛親僧都とて

眞乗院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物を好みて、多くくひけり談義の座にても、大きな鉢にうづだかく盛りて膝もとに置きつつ、食ひながら、書をも讀みけりわづらふことある時には、七日二七日など、療治とてこもりぬて、思ふやうに、よき芋頭を擇びてことに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はすることなし。ただ一人のみぞ食ひける。

たりの。他人には與へず、只自分一人にて食ひたり。非常に貧乏なりしが、其帥匠の僧の臨終に、錢二百貫を寺院一字を形見として贈與されしが寺院を百貫に賣却し、かれこれ都合三百貫を芋頭の代金と定め京都市の人に預けおき、時々十貫に對するだけつつ取り寄せ、芋頭を不自由なく食ふ中に、外の事には一錢をも使はずして終につきはてたり三百貫の錢を貧乏なる身にもらひ、かく取計らへるは、實

極めて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、錢二百貫と坊一つを譲りたりけるに、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を、いもがしらの錢と定めて、京なる人に預けおきて、十貫づつ取り寄せていもがしらを、ともしからずめしける程に、又こどように用ゐること無くて、その錢、皆になりにけり。三百貫のものを、貧しき身にまうけて、かくはからひける。まことにあり難き道心者なりとぞ人申しける。
この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。『こは何ものぞ』と、人の問ひ

に世に稀なる佛法家なり、世人がうはさしあへり。此僧都、或法師を見て、しるうるりさ云ふ名を附けたり。「しるうるりは何物ぞ」此人尋ねしに、「自分も知らず、若しも有らば此僧の顔に似たるべし」と答へられたり。盛親僧都は容貌うつくしく力もつよくして大食し、達筆なるが上に學者、また口辯も人に超え、一宗の正法を傳ふる人故、仁和寺中に於ても重んぜられしも、世を度外におく變

人にて、何事もわがままに、少しも人に従はず。佛事にゆき馳走の時分にも、一座の人々へ配膳の終るを待たず、自分の前にきたれば、直に一人食ひ、歸りたくなれば、つき立ち去りたり。とき非時の如きも、人と同じ時刻を定めず自分が欲する時に食ひ、眠たくなれば晝にても一室にはいり、如何なる大事件出来ても、人の言を取り上げず。目さむれば幾晩もいれず、心をすまして詩歌誦し逍遙し、尋

ければ、「さるものを、われも知らず。もし、あらましかば、この僧の顔に似てん」とぞいひけるこの僧都、みめよく力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも、重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたるくせものにて、よろづ自由にして、大かた、人に従ふといふことなし。出仕して、饗膳などにつく時も、みな人の前するを待たず、わが前に据ゑぬれば、やがて、一人うちくひて、歸りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。とき非時、人にひとしく定めて食はず、わがくひたき時

夜中にも、曉にもくひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと、聞き入れず。目さめぬれば、いく夜も寝ず、心すましてうそぶき歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。徳のいたりけるにや。

註解 眞乘院は、仁和寺中の一院。●いもがしらは、芋頭を書す、正しくは芋魁と書すべし。おやいも。ささいもの根。●談義は、説法。説教。●わづらふは、病氣にかかると。●死にさまは、しにぎは。いまは。臨終。●坊一つ、寺院一つ。●三萬疋は、三百貫。●さもしからずめしは、さもしは

常ならざりしかども、人に嫌はれず、萬事の我儘をゆるされしは、正義善道を身にそなへ盡せる故なむべし。

一三八
乏し、めしは召し、即ち、十分に取寄せしこと。●こまよは、異用なり、外の用事。●道心者は、佛道家の義。●しるるりは、白瓜の説あれども、本文にも見ゆる如く、われも知らずとあれば、口よりでまかせの語と見てよからん。要するに、つまらぬ僧の義。●みめは、容貌。●學匠は、學者の義。●宗の法燈は、一宗の正法を承繼する人の義。●くせものは、かはりもの。へんじん。●出仕は、佛事などにゆくこと。●さきは、齋の字を用ふ、僧家にて食事の稱、正午を過ぎざるを法とす。非時は、午後の食事。●人にひさしくは、世人と同じく。●うそぶき歩きは、詩歌など打ち誦して逍遙すること。●徳の云云は、人に嫌はれざりしは正義善道を身にそなへ盡せる爲めなるべしとの義。

●第六十一段

御産の時、こしき落す習慣は必ずしも一定したるに非ず御胞衣おりざる時のまじなひなり、やすくおりば、こしき落す事なし。民間の人々よりはじまれり云ふ確説もなしこしきは大原の里よりせらる寶藏にありし古き繪に、しも様の人の出産せる所に、こしき落せるものを書きありき。

●第六十一段 御産の時

御産の時、こしき落すことは、定れることにはあらず。御胞衣とごこほる時のまじなひなり。ごこほらせ給はねば、この事なし。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里のこしきを召すなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子産みたる所に、こしき落したるを書きたり。

註解 御産は、后などに對して云ひし語。●こしきは、飯なり物をむしかしぐ具。皇子御降誕には南へ、皇女におはせし時は北へ落すを例とす。胞衣は胎内の子の敷き居るより、飯こ子敷に相通はせたるにて、之を落すは胞衣の下る様にそのま

じなひなり。●大原の里は、京都の北なる村の名。是も大原
おほはら あひかよゆえ
さ大腹さよみ相通ふ故、胞衣の滯らざらん事を意味し、飯も
このさよ おしどりよ
此里より御取寄せになるこの義なり。●寶藏は、奈良正倉院
はうざう
の寶藏なるべきか。

●第六十二段

延政門院御幼少の頃、後嵯峨
上皇の御所へまゐる人に、言
づてするま仰せられ「二つ文
字」の御歌あり。戀しく思ひ
居るま言ひ給ひしものなり。

○第六十二段 延政門院

延政門院、いどきなくおはしましける時、院へ参
る人に、ことづてとて、申させ給ひける御歌。
ふたつもじ牛の角もじすぎなもじ

ゆがみもじとぞ君はおぼゆる
こひしく思ひ参らせ給ふとなり。

註解 延政門院は、後嵯峨帝の皇女、悦子内親王の御事。●ふ

たつもじは、二つの文字、即ち、この字。●牛の角もじは、
いの字。●すくなもじは、しの字。●ゆがみもじは、くの字
こいしく即ちこひ(戀)しくの隠語の和歌。

○第六十三段 後七日の阿闍梨

後七日の阿闍梨、武者をあつむること、いつとか
や、盗人にあひにけるより、宿直人として、斯く事
々しくなりにけり。一年の相は、この修中のあり
さまにこそ見ゆなれば、兵を用ゐんこと、穩かな
らぬ事なり。

註解 後七日は、正月八日より七日間、宮中眞言院に行は
る御佛事。●阿闍梨は、師となるべき僧、又、僧の官名。

●第六十三段

後七日の御佛事つむむる法師
が、武士を召集して四門を警
護せしむる事の起りは、曾て
同じ御佛事の時に盗難にかか
れるにより、宿直する人とし
て斯くも仰山になりたり。一
年中の吉凶は、この御佛事中
に知らるるが故に、甲冑武者
を使用するは、戦亂の前兆ら

しく見えて不穩當なり。

●第六十四段

車の五緒は、是非とも乗る人の如何によらず、身分に應じて、高官高位に達したるとき乗るべきものなり、或人申されたり。

●第六十五段

現代の冠は古代のより高くな

此處にては、單に法師を解してよかるべし。●武者を云ふは甲冑武者を召集して四門を警護せしむる事。●一年の相は、一年中の吉凶。●兵は、甲冑武者を云ふ。

○第六十四段 車の五緒は

車の五緒は、必ず、人によらず、ほごにつけて、きはむるつかさ位に至りぬれば、乗るものなりとぞ、ある人、仰せられし。

註解 五緒は、二説あり、一は車の簾につくる飾。一は車の天井につけ、揺るる際にさりつく緒なりと。●きはむるつかさ位は、高官高位。第一の官、第一の位。

○第六十五段 この頃のかぶりは

この頃のかぶりは、昔よりははるかに高くなりた

れり。或人申されたり。古の冠の入物を有する人は、その桶のがはを過ぎて高くし、現に使用し居るなり。

●第六十六段

岡本關白殿、満開の紅梅の枝に、雉子一番この枝につけ來よ。御鷹匠の武勝に命ぜられしに、「花に雉子つくる方式知らず。又一枝に二羽つくる事をも存せず」と答へぬ。料理番の役人に問はれて後、「然らば其方が心まかせにつ

るなりとぞ、ある人、仰せられし。古代の冠桶をもちたる人は、はだを過ぎて、今もちあるなり。

註解 かぶりは、冠なり。●冠桶は、冠を入れおくもの。●はだは、肌の義。桶のがは。

○第六十六段 岡本關白殿

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙を添へて、この枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ、知りさふらはず。一枝に二つつくることも存じ候はず」と、申しければ、膳部にたづねられ人々に問はせたまひて、また、武勝に、「さらば

け来よ」を命ぜられしが、花もなき梅の枝に、一羽をつけて差し出せり。

武勝の言葉に「鳥柴の枝は、梅ならば蕾ある枝が又は花散りしものにつく。五葉松などにもつく。枝の長さは七尺或は六尺、枝をはすにきり、其裏をそぐ。枝の中程に鳥つけ鳥にふますべき枝も入用なり青かづらにて二箇所を結びつく。その葛の先は鳥の火打羽の長さにきり、牛の角のやうにまぐべし。初雪降りし朝、

一四四
おのれが思はんやうにつけて参らせよ』と、仰せたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて参らせけり。

註解

岡本關白殿は、左大臣藤原家平を云ふ。●鳥一雙、さりひさつがひ。即ち、雌雄二羽、鳥は雉子なり。●膳部は、多く膳司と書す、食膳を司る人。●おのれがは、自分が。おまへが。

武勝が申し侍りしは、『柴の枝、梅の枝、つぼみたるど、散りたるどにつく、五葉などにもつく。枝の長さ七尺或は六尺、かへし刀、五分に切る。枝の半に、鳥をつく。つくる枝、踏まする枝あり

枝を肩にして中門より禮儀正して参上す。大砌の石傳ひ雪には足形つけず雨覆の毛を聊かかき亂して、二棟の御所の高欄に寄せかく。賜物あらば肩にかけて御禮して退く。初雪にても沓のさき隠るる程に降らぬ時は参上せず。雨覆の毛をみだすは鷹のさりしやうに見せんとてなり。花に鳥をつけぬと云ふ事は、何故なるべきか。長月のころしかく、伊勢物語にも出づ。造花ならば、さしつかへ

一四五
しじら藤のわらぬにて、二所つくべし。藤のさきは、ひうち羽のたけにくらべて切りて、牛の角のやうにたむべし。はつ雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて参る。大みぎりの石をつたひて、雪にあとをついで、あまおほひの毛を、少しくかなぐり散して、二棟の御所の高欄に寄せかく。祿を出さるれば、肩にかけて、拜してしりぞく。はつ雪といへども、沓の鼻のかくれぬ程の雪には参らず。あまおほひの毛をちらすことは、鷹は、よわ腰をさることなれば、御鷹のとりたるよしなるべしと申しき。

無きものなるか。

註解 五葉は、五葉の松なり。●かへし刀は、枝をはずかひにきり、その裏をそぐを云ふ。●しじら藤は、つづら藤。あなかつら。●ひうち羽(火打羽)は、鳥の羽翼の端末。はれのさき。●ふるまひては、容儀をただして。●あまおほひの毛、(雨覆の毛)は、雉の尾のつけれの毛。●二棟の御所は、屋根を二つのやうに作りし御所。●祿は、たまもの。下賜物。昔は使者などに、衣服を下さるが例なりき。●あまおほひの毛をちらすこまは、雉の尾のつけれの毛を開き亂しおく事は●よわ腰は、腰の左右の細き處。こしのつけれ。

花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけん、長月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて、『君がためにと折る花は、時しもわかぬ』と、いへる

こと、伊勢物語に見えたり。つくり花は、くるしからぬにや。

註解 長月ばかりには、九月の頃に。長月は、陰曆九月の異稱なり。●くるしからぬにやは、可るべきかご兼好法師が不善を起せしなり。

●第六十七段

賀茂神社の境内なる岩本の社は在原業平、橋本の社は藤原實方を祀る。世の人常にいひ違へて居る故、或年参詣せし折「老年の神官の通りかかりしをよびさめて尋ねたるに、

○第六十七段 賀茂の岩本、橋本

賀茂の岩本、橋本は、業平、實方なり。人の、常にいひまがへ侍れば、一年、参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼びとどめてたづね侍りしに「實方は、みたらしに、影のうつりける所と侍れば、橋本や、なほ、水の近ければとおぼえ侍る。

「實方の社は、御洗川に影のうつる所、縁起にあり、橋本の方は一入水に近き故、それなるべし。吉水和尙も一月をめでしかく」と詠まれたるは、岩本の社と聞きなれど、自分等よりは却て貴君方が御承知の事なるべし」と丁寧に答へたるは、いたく感心したり。

今出川院に奉仕せる近衛さいふ女官、歌集等にも其よみし和歌多く入りたる人は、年若き頃いつも百首の歌よみ、波

吉水の和尙、「月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はここにあり原」と、よみ給ひけるは岩本の社とこそ、うけたまはり置き侍れど、おのれらよりは、なかく、御存知なごもこそ、さぶらはめ」と、いとうやくしくいひたりしこそ、いみじくおぼえしか。

註解 賀茂の岩本、橋本は、共に神社の名、岩本の社は在原業平、橋本の社は藤原實方を祀れり。●みたらし(御手洗は)、神社の前なる口、手なごを清むるための水。此處にては、みたらし川をさして云ひし語。●吉水和尙は、慈鎮和尙のこゝ東山也阿彌に閑居す、その石階の下に清水あり、吉水と云ふ

の岩本橋本の二社の御前の水にて書き、業平實方の靈に手向けられたり。實に尊き名譽あり、人口に膾炙する歌多し文章や漢詩さては詩の小序なごも上手の人なりき。

故にこの名あるなり。●和尙は教師の義。又、僧位、天台宗にては「くわしやう」、禪宗にては「をしやう」と云ふ。●なかくは、かへつて。

今出川院近衛とて、集ごもに、あまた入りたる人は、若かりける時、常に、百首の歌よみて、かのふたつの社の御前の水にて、書きて、手向けられけり。まことに、やんごとなき譽ありて、人の口にある歌多し。作文詩序など、いみじく書く人なり。

註解 今出川院近衛は、龜山天皇の中宮藤原嬉子に奉仕せる近衛と云ふ女官。中宮は、皇后の外に設けられたる妃の位。む

かしは、三宮の總稱。又、皇后の御所。轉じて、皇后の御稱なりき。●集は、歌集。●いみじくは、たくみに。上手に。

●第六十八段

九州に、何某云ふ押領使の如きものありしが、大根を萬事につけての妙薬として、毎朝二本宛を焼きて食ふこと、永年に及びたり。或時、館に人數なきすきを見、敵兵不意に攻め寄せたるが、館内に兵士二人出で來、一生懸命に手いたく戦ひ、之を追ひ拂ひたり。何某は甚だ不審におもひ

○第六十八段 筑紫に

筑紫に、某の押領使などいふ様なるものありけるが、土大根を、よろづにいみじき薬とて、朝ごとに、二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館の中に、人もなかりける隙をはかりて、敵、襲ひ來りて、圍み攻めけるに、館の中に、兵二人出できて、命を惜まず、戦ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議におぼえて、『日頃こゝにもものし給ふとも見えぬ人々の、かく戦し給

「いつも此處へ居らるる方々さも見えぬに、斯様に防がれ給ひしは、何人ぞ」と尋ねしに「永年頼みに思はれて、毎朝食ひ給ふ大根でござります」と云ひ消え失せたり。深く信頼すれば、かやうなる徳もあるものなり。

ふは、いかなる人ぞ」と、いひければ、「年ごろたのみで、あさなくめしつる、土大根にてさぶらふ」と、いひて失せにけり。深く、信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

註解 筑紫は、九州の古稱。●押領使は、二三郡を領して代々治め居るもの、などいふ様云は、押領使に類したるものとの義。即ち、地方の豪族の如きもの。●土大根は、だいこん。●襲ひは、不意に攻めくること。●めすは、食ふこと。敬語。●信をいたしぬれば、大いに信用さへすればと云ふ程の意

●第六十九段

書寫山の性空上人は、法華經

○第六十九段 書寫の上人は

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根清淨

まみし功德により、六根清淨に適ひし人なり。旅中に宿屋へ入られたるが、豆殻たきて豆を煮る音の、つぶ／＼と聞かれて、釜の中の豆が「親しき間柄のお前達か、恨めしくも吾等を煮て辛き目に遇はするよ」と言ひたり。燃され居る豆殻のはら／＼と鳴るおまは、「自分達の本心にてする業ならず、焼かるるはこれほど忍びがたきか知れざれど、如何とも力およばず、さやうに恨み給ふべからず」と聞え

たり。

一五二
にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られるに、豆のからをたきて、豆を煮けるおとの、つぶ／＼と鳴るを聞きたまひければ、「うとからぬおのれらしも、うらめしく、われをば煮て、からきめを見するものかな」と、いひけり。たかる豆がらの、はら／＼と鳴る音は、「わが心よりすることかは、やかるるは、いかばかり堪へ難けれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞきこえける。

註解 書寫は、播磨國飾磨郡會左村大字書寫にある書寫山圓教寺を云ふ。上人は、性空といふ法師なり。●六根は、生死流

轉の惑ひを生ずる因となる六種のもの。即ち眼・耳・鼻・舌・身意の稱。清淨は、六根の妄執を斷するること。●からきめは、つらき思ひ。うめき。●事少しく異なれども世説に曰く「魏の文帝、嘗て東阿王をして七歩に詩を作らしむ。成らずば、法に行はんと。即ち、聲に應じて詩を爲りて曰く、豆を煮て持して羹を作り、岐を漉して以て汁を爲る。其は釜底に在りて燃え、豆は釜中に在りて泣く。本是れ同根生、相煎る何ぞ太だ急なるぞ。文深く慙色有りしと」文帝は曹丕、東阿王は其弟の曹植なり、世に之を七歩の才と稱す。

●第七十段

元應年間、清暑堂の御遊の折、玄上の琵琶は既になくなりし

○第七十段 元應の清暑堂の御遊に

元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭のおとど、牧馬を弾じ給ひけるに、座について、

時故、菊亭の大臣が牧馬と云ふ琵琶をひかれしが、其席につき先づ以て柱をしらべられしに、一つ落ちたり。御懷中に用意のそくひ取出され、即座にその落ちし柱をつけられたり。神へ御供へ何かする間に、つけたるそくひはよく乾き、故障なく奏彈をすまされぬ。如何なる心ありての事か知られど、衣被して見物する女官が、近寄りて柱をばづしそつと元の通りにして置けるものなりしと云ふ。

まづ、柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふどころにそくひをもち給ひたるにて、付けられにければ、神供の参るほどに、よく乾て、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけん、もの見ける、きぬかづきの、寄りて、はなちて、元のやうに置きたりけるとぞ。

註解 元應は、年號の名、後醍醐帝の御宇。●清暑堂の御遊は、大嘗會の御式後、この堂にて御神樂あり、その事終れば、樂なごの御催しあるを云ふ。●玄上は、琵琶の名。●牧馬は、琵琶の名。●菊亭のおまごは、兼季公。おまごは、大臣なり給ひけるは、給ひけるに。●柱は、絃を支へもつもの。●そくひは、飯粒をねりし糊。●いかなる意趣は、軽く解すれば「ごんなつもり」重く解すれば「ごんな恨み」。

●第七十一段

其名を聞くさすぐさま、面ざしはそれと推量さるる氣すれど、會へば前日豫想せる顔の人は無し。むかしの話聞きても、今日に在る人の家にすれば、今日に在る人の家にすれば、今日に見る人の家の中にて誰々に比せらるるは、自分と同様に誰も然か

○第七十一段 名を聞くより

名を聞くより、やがて、おもかげは推し量らるる心地するを、見る時は、又、かねて思ひつるままの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこほどにてぞありけんと思え人も、今見る人の中のおもひよそへらるるは、誰も、かくおぼゆるにや。又、いかなる折ぞ、ただ今、人のいふことも目に見ゆるものも、わが心の

思はん。又今、人の話す事も
目に見るものも、自分の心の
中も、斯の如き事いつ有りし
と思ひだされど、確かにあり
し心するは、自分のみ然か思
ふことにや。

●第七十二段

下品に見ゆるは、居所に道具
の多き、硯箱に筆の多き、
持佛堂に佛の多き、庭に竹
石の多き、家に子孫の多
き、人に逢しき口かすの多
き、祈願の書に作善多き

中も、かかることの、いつぞやありしかと覚えて
いつとは思ひ出でねど、まさしくありし心地する
は、いればかり、かく思ふにや。

註解 やがては、すぐに。●おもかけ(面影)は、佛の字をも用
ふ。おもさし。かほつき。●かれては、つれに。前から。●
まさしく。たしかに。

○第七十二段

いやしげなるもの

いやしげなるもの、居たるあたりに、調度の多
硯に筆の多き。持佛堂に佛の多き、前裁に、石、
草木の多き。家の中に子孫の多き。人に逢ひてこ
とばの多き。願文に作善多く書きのせたる。多く

なり。多くてもよきは文車の
書物と塵溜のこみとなり。

て見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

註解 いやしげなるものは、下品に見えるのは。●居たるあた
りには、座邊の義。●調度は、だうく。●前裁は、うみこみ。
には。●願文は、神佛へ願かけの文書。●作善は、自分の善
事を多く書きつらぬるを云ふ。●文車は、下に輪ありて引く
やうに作れる書棚。●塵塚は、ちりだめ。

●第七十三段

世間にいひ傳ふる話は、眞實
の事は愛想なきものか、十中
の八九は虚言なり。人は實際
以上にいふにより、況んや年
たち場所も遠きと、口よりで

○第七十三段

世に語り傳ふること

世に語り傳ふること、まことは愛なきにや、多く
はみな、そらごとなり。あるにも過ぎて、人はも
のをいひなすに、まして、年月過ぎ、境も隔りぬ
れば、言ひたきままに語りなして、筆にも書きと

まかせに話して、文章にも書かれたれば、いつしか眞實の事と決定す。斯道に勘能の人の妙處など、愚にしてわけ知らぬ人は、何かなしに神に等しくいへど、その道のわけ知れる人は、一向に信ぜず。噂にきくを見る時は、萬事萬物案外に相違するものなり。言ふ一方より虚言の皮がはぐるをも問はず、口にまかせて言ふは、直ちに無根さいふ事あらはる。又自分も不眞實と思ひつつ、人の言ひし通りに

ごめぬれば、やがて定りぬ。

註解 まごとは愛なきにやは、實際の事は面白くないかしらん。●そらごこ(虚言)は、うそ。虚構。●あるにも過ぎては、實際の事にわをかけて。●境も云云は、土地も隔てし遠方であるから。●やがて云云は、眞實の事になつて仕舞ふこの義。道々のものの上手の、いみじきことなど、かたくななる人の、その道知らぬは、そぞろに神の如くにいへども、道知れぬ人は、更に、信も起さず。音に聞くと見る時は、何ごともかはるものなり。註解 道々は、もろくの藝道。諸種の専門的技藝。かたくなは、頑固。氣質かたよりて事理に通ぜざること。●そぞろは

鼻を動かして話するは、其人の虚言にはあらず。尤もらしく、所々を不確にいひ、精しく知らぬさまなし、併し話のあさきは能く合ふやうに語る虚言は恐るべき事なり。自身顔のよくなる様に言はれたる虚言は、何人も反對はせず。一座の人の面白がる虚言は、自身一人然らず云ふも益なきまま聞き居る内に、終には其證據人にさへされ、いよく眞實の事と決定し終る何ぞいつても、虚言の多き世

やつたら。むやみ等の意。●音に聞くごは、評判で聞くご。かつあらはるることも顧みず、口にまかせて言ひちらすは、やがて浮きたることと聞ゆ。又、われも、まごとしからずは思ひながら、人の言ひしままに、鼻のほごをぐめきていふは、その人の虚言にはあらず。げにげにしく、所々うちおぼめき、よく知らぬ由して、さりながら、つまぐ合はせて語るそらごとは、恐ろしき事なり。わがため、面目ある様にいはれぬ虚言は、人、いたくあらがはず。みな人の興する虚言は、一人、さもなかりしものをと、言はんも詮なくて、聞き居たるほど

なり。ゆゑに、平生にある珍
らしからぬ事と承知して居ら
ば、何事にも誤りなし。下等
の人の談話は、びつくりする
事ばかりなり。高貴なる人士
は、決して不思議なる事を口
にせず。

斯うは云ふものの、神佛の靈
驗や、權者の傳記、それ程信
ぜざれといふべきにもあらず
これは俗聞の虚言を一途に信
するも笑止なれど、まさか有
るまじと云ふも益なき事故、
大抵は眞實として受けて一心

に信させず又、疑び且つ輕蔑
すべからず。

一六〇
に、證人にさへなされて、いとご定りぬべし。

註解 かつ云云は、言ふ一方から其虚言が知れるをも頼着なく
●浮きたることは、浮言の義。うそ。●をこめて、うごめ
(蓋)かして。●うちおぼめきは、ふたしか。ぼんやり。●つ
まぐ(袂々)は、話のあさき。はしく。●名目ある様に
は、おのれの名譽になるやうに。●あらがはずは、争はぬ。
抵抗せず。●詮なくて、仕方なくして。しやうがないから
と云ふ程の意。

兎にも角にも、そらごと多き世なり。ただ、常に
ある、珍しからぬことのままに心得たらん、萬に
違ふべからず。下さまの人の物語は、耳驚くこと
のみなり。よき人は、あやしき事を語らず。

註解 耳驚くは、聞きてびつくりする。●よき人は、高貴又は
高尚なる人。

かくは言へど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ
信せざるべきにもあらず。これは、世俗のそらご
とを、ねんごろに信じたるもをこがましく、よも
あらじなどいふも、詮なければ、大かたは、まこ
としくあしらひて、ひとへに信せず、又、疑ひ嘲
るべからず。

註解 奇特は、普通さちがふこと。ふしぎ。●權者は、神佛な
ごの權(か)りに此世に化現したるを云ふ。●をこは、痴の字
又は烏滸の字面を用ふ。笑ふばかりに愚なること。●ひとへ
に(偏)は、いちづに。心を傾けて。

第七十四段

蟻のやうにたかり、四方に急ぎ奔走する人を見るに、尊卑老若さまんなり。そして行くさき、歸る宅あり。夜はやすみ朝には起き出づ。その仕事は如何なる事ぞ、成るべく長生して金まうけせん。暫時のひまもなし。身を大事にして何事の到来をまつぞや只老と死とが来るのみなり。而もその早きこそ時々刻々に近づく。この老と死とを待つ間、如何なる樂みあるべき。

第七十四段

蟻の如くに集りて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり、老いたるあり、若きあり行く所あり、歸る家あり。夕にいねて、朝に起くいとなむどころ何事ぞや。生を貪り、利をもとめて、やむ時なし。身を養ひて、何事をか待つ、期する所、ただ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間に止らす。これを待つ間、何の樂かあらん。まごへるものは、これを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。おろかなる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

名聞利慾に迷ふものは前途の事を問はぬ故、老と死をば恐れず。愚者は又これを悲しみて長生を願ふが、これは萬物變化の道理を知らぬがためなり。

第七十五段

無聊にこまるこそ云ふ人はいかなる心なるべき。只一人にて住むこそ、外へ心散らすして可。世に従ひ人に交際すれば俗事に汚され、言行共に他人の手前を憚る故、全く自分の本意にあらず。人に戯れたり

註解 蟻の如くの句は、此世に處する人の多きをあらはしたる語。●期する所は、まちて來るものはこの義。●念々の間は時々刻々のあひだ。暫くもの義。●常住は、生滅なく變遷なく常に存在するところ。●變化の理は、萬物變化の道理。

第七十五段

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるる方徒然わぶる人は、いかなる心ならん。まぎるる方なく、ただ一人あるのみこそよけれ。註解 わぶる人は、思ひわづらふ人。世に従へば、心、外の塵にうばはれて、惑ひやすく、人に交はれば、詞、よその聞きにしたがひて

口論したり、時には恨み、時には嬉しがる。少しも一定せる事なし。物事に對する是非の心頼りに起り、利害の念やまず。迷しひ上にも酔ひ醉中に夢みるなり。名聞利慾ゆゑに奔走し、ほけて死の近づくを忘るること、萬人何れも此通りなり。

また佛道を悟らすも浮世の縁を離れて身を静所におき、世事に關係せず心を安らかにするが、先以て樂しみと云ふべし。人事上の一切の諸縁を

絶てよと、摩訶止觀にも見ゆるなり。

さながら心にあらず。人にたはぶれ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事、定れることなし。分別、みだりに起りて、得失やむ時なし。まごひの上に酔へり。酔の中に、夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人みな、かくの如し。

註解 外の塵は、外界のけがれ。俗事。よその聞きにしたがひては、言行共に他人の手前を氣がれること。ほれては恍惚として。

未だ、まことの道をしらずとも、縁をはなれて身を静にし、事にあづからずして、心をやすくせん

こそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

註解 縁は、うき世のゆかり。摩訶止觀は天台大師の觀心の事を述べられし書。摩訶は、大の義。止觀は、禪定を修めて、内心に起る散亂動搖の妄想を止め、事理を照見し諸法を識別すること。

○第七十六段 世のおぼえ花やかなる

あたり

世のおぼえ花やかなるあたりに、なげきもよるこびもありて、人多く行きとぶらふなかに、びじり

●第七十六段

世の聞えよき所に、悲觀あり人の多く見舞ふ中に、聖法師くははり、案内乞ひ門外に立ちさまり居るは、さやうに轡

門に媚びずとも見ゆ。たさひ用ありとも、僧侶は世の人に親しますともよし。

法師のまじりて、いひ入れ、ただすみたるこそ、然らずとも見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。

註解 世のおぼえは、世の信用。世間の評判。なげきもよる。こびもば、悲しき事も目出度事も。さるべき故は、時めく權勢家を訪ふべき相當の理由。人にうとく云云は、世俗の人さは親しまぬがよいさの意なり。

●第七十七段

世間に、當時の人のもて囃し居る物事を、關係すまじき法師が、十分に様子知りたり、人にも談話し、自分は尋ねる

○第七十七段 世の中に

世の中に、その頃、人のもてあつかひぐさに言ひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく、案内しりて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそ

と云ふ點がてんゆかす。分けて片田舎の法師如きは、世間の人事を自分のやうにして尋ねるなど、如何にして斯様に承知かと思はるる程、言ひふらすやうなり。

うけられぬ。ことに、かたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、わが如くたづね聞き、いかでかばかりは知りけんと、おぼゆるまでぞ、言ひちらすめる。

註解 人のもてあつかひぐさは、當時の人もてはやして居る事。いろふは、あづかる。關係す。うけられぬは、受け取れぬ。合點がゆかす。かたほとりは片田舎。へんび。言ひちらすは、言ひふらす。めるは、物事の狀態を然りき推測して云ふ意の語。やうじや。

●第七十八段

當世風の珍らしき事を言ひふ

○第七十八段 今やうの事

今やうの事どものめづらしきを、言ひ廣めもてな

らして流行するも、これも亦
合點ゆかず。人の知りきりた
る古めきし事を知らざる人は
奥床し。初客などの時、土地
の方言又は物の符牒緯名など
知れる同志が片端だけ言ひ目
笑などする、其意味を知らぬ
初客に何事いふかと思はす
る事、世事にうき下等の人
に有りがちの事なり。

一六八
すこそ、又承けられぬ。世に事奮りたるまで知らぬ人は、心にくし。今更の人などのある時、こゝもどに言ひつけたる、ことぐさ、物の名など、心得たるごち、かたはし言ひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心知らぬ人に、心得ずおもはすること、世なれず、よからぬ人の、必ず、あることなり。

註解 今やうの事は、當世風の物事。●又承けられぬ。またしても合點がゆかぬ。●事奮りは、ふるきはなし。●心にくしは、奥ゆかしい。●今更の人は、初めて来た人。初めて逢うた人。●心得たるごちは、知りあひのなか。知った同志。●

世なれず、よからぬ人は、俗情にたけぬ下品なる人。

○第七十九段 何ごども

●第七十九段
何事に限らず、人前にては其
道に關係せぬ風にするぞよき
高尙なる心の人ば知りし物
事も、知り顔しては語らず、
田舎から來たる人は却て知り
し風に返事をぞする。故に都
の人も恥かしき程に通曉して
居る人物もあるけれど、自身
にえらしき思へるさま、頑愚
なり。十分に達したる道の事
は、輕々しく語らず、尋ねら

何ごども、入りたたぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ、知り顔にやはいふかた田舎より出でたる人こそ、よろづの道に、心得たるよしの、さしいらへはすれ。されば、世にはづかしき方もあれど、自らいみじと思へるけしき、かたくななり。よく辨へたる道には、必ず口重く、問はぬかぎりには、言はぬこそいみじけれ。
註解 何ごども云は、學問でも遊藝でも、人なかにては其道にたづさばらぬ風を見するがよいこの義。●やはは、反語。

る外は慎しみて答へぬぞよき。

●第八十段

人は皆、自身に關係すくなき事ばかり好む。僧侶は武道をみがき、田舎武士は弓引くわざ知らず。佛道を知れる顔して連歌なし、音楽さへ修めたり。しかし、如何程上手になるも、下手な自分の道に比すれば、なほ世人に輕蔑せらるべし。武道を好むは僧侶ばかり

一七〇
知り顔には言はぬその義を表はす語。●さしいらへば、返事かたくな(頑固)は、かたいち。●口重くは、容易く物言はぬこと。言ふ事をつつしむこと。

○第八十段 人ごとに

人ごとに、わが身にうときことのみぞ好める。法師は、兵の道を立て、夷は、弓引くすべ知らず。佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃をたしなみあへり。されど、おろかなる、おのが道より、なほ人に思ひあなごらるべし。法師のみにあらず、上達部、殿上人、上さままで、おしなべて、武を好む人多かり。百たび戦ひて、百たび勝つとも、未

りに非ず。上達部の如き上流社會にも多し。百戦百勝してもまだ武勇の名を定めがたし。なぜかさなら、幸運にて敵を破る時は、何れも皆勇者なり。刀折れ矢盡きても降参せず、花々しき最期して始めて名を揚ぐるが武士の道なり生きて居る間は、決して武勇さほこるまじきぞ。元來武道は、人倫に遠ざかり、鳥や獸にひざしき野蠻の行爲、其家代々武道のものにあらざれば好めりさて無益の事なり。

だ武勇の名を定め難し。その故は、運に乗じてあつたをくだく時、勇者にあらずといふことなし。兵つき、矢きはまりて、遂に、敵に降らず、死をやすくして後、はじめて、名をあらはすべき道なり生けらんほどは、武にはこるべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

註解 わが身にうときは、自身に縁の遠き。身に關係のなき。●夷は、東夷の義、あなかぶし。●すべは、術なり。わざ。●連歌は、三十一文字の歌の上下二句を二人して詠むこと。●管絃は、後に、五十韻百韻と連れ詠むこと行はれたり。●管絃は、

いさたけ。轉じて、音曲。●氣色しは、けしきし。やうすし
 ●上達部は、三位以上の殿上人の稱。●殿上人は、殿上に昇
 るを許されたる人。即ち、四位以上の公家及び六位の藏人。
 ●上さまは、上流社會。●あたをくだく時は、敵をうち破る
 時分。●兵つき矢きはまりては、兵死し武器も盡きはて矢も
 折れて。●死をやすくして後は、悠然として立派なる最期を
 送げてのち。●人倫は、吾人のふみ行ふべき道。●その家に
 あらずば、武士の家柄でない以上はその義。

●第八十一段

屏風や障子などの繪や文字、
 げびたる筆致の見苦しきより
 も、却て其家の主人が拙劣に
 思はるるなり。大概所有の道

○第八十一段 屏風障子どもの繪も

屏風、障子などの繪も、文字も、かたくなる筆様
 して書きたるが、見にくきよりも、宿の主人の、
 つたなく、おぼゆるなり。おほかた持てる調度に

具類に於ても、見劣りせらる
 る事あらん。別に善きもの所
 有せよ云ふにもあらず。丈
 夫なりとの口實にて、下品に
 見苦しきふうを作り、珍らし
 きふうにせんさて、無用の小
 細作をつけ加へてくごき好み
 をせしを云ふなり。陳腐のさ
 まなるも甚だ仰山らしからず
 費用も多額を要せず、品質の
 善きを、眞の善きものとする
 なり。

ても、心劣りせらるることはありぬべし。さのみ
 善き物を持つべしにもあらず。損せざらんため
 とて、品なく、見にくさまにしなし、珍しからん
 とて、用なきことども爲添へ、わづらはしく、好
 みなせるをいふなり。ふるめかしき様にて、いた
 く事々しからず、費えもなくて、物柄の善きが善
 きなり。

註解 障子は、今のからかみなり。●かたくななる筆様は、げ
 びた筆つき。●おほかた云は、大概所有の諸道具も。●心
 劣りは、みおさり。●品なくは、げびんに。●費えもなくて
 は、費用もかからず。●物柄は、しなから。品質。

「うすき絹地の表紙は早く破損する故悪い」と或人云ひしに、頓阿法師は「そのうす物の表紙は上下そんじ、青貝細工の巻物の軸は、貝はげ落ちてのち初めて妙なり」と言はれたる事、成程と感心せられたる又他になき一部の草紙等の各冊がまち／＼なるを見苦しと云ふ人あれど、弘融僧都は「物を是非そろはせんとするは心の拙なき者のする事なり不揃の點がおも白し」と言は

○第八十二段 うすものの表紙は

「うすものの表紙は、とく損するがわびしき」と人のいひしに、頓阿が「うすものは、上下はづれ螺鈿の軸は、貝落ちて後こそ、いみじけれ」と、申し侍りしこそ、心まさりておぼえしか。一部とある草紙などの、同じやうにあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、「ものを、必ず、一具にととのへんとするは、拙きものとする事なり。不具なるこそよけれ」と、いひしも、いみじくおぼえしなり。すべて、何もみな、ことごとこのほりたるは、悪しきことなり。爲殘したるを、さて打

れしも亦妙と思はれぬすべて、物事の十分に調ひしは善からざるなり。しかけて其儘に打ちすてたるは、趣味深く壽命の延びる思ひぞする。御所を造營するにも、きつと何處か造り残す事なりと、或人言はれたり。先哲の作られたる佛書やその以外の書物にも、章段の不足の例ばかり有るぞかし。

ち置きたるは、おもしろく、生きのぶるわざなり内裏造らるるにも、必ず、造りはてぬ所を殘すことなりと、ある人、申し侍りし也。先賢の作れる内外の文にも、章段のかけたることのみぞ侍る。

註解 うすものの表紙は、薄き絹物にて作りたる巻物の表紙なごを云ふ。●頓阿は、法師にして二條爲世卿の門人、慶雲、淨辨、兼好と共に和歌の四天王と稱せられたる人。螺鈿はあながひざいく。貝殻にて種々の物象を作り、器物の面に漆にて塗りこめたるもの。青貝細作。軸は、巻物のしんぎ。●一部云は、一部幾巻かの本がふそろひなること。●弘融僧都は、伊賀國佛性寺の住職、和歌を善くせり。●不具は、ふそろひ。●ことごとこのほりたるは、調ふ即ち、そろひたるは。

●第八十三段

西園寺公衡公、太政大臣に昇進なさるるのは、別に何の故障もおありなきぬのに「昇るべき人ののぼるは珍らしからず、自分は左大臣限りにて辭すべし」と云ひ、入道し給ひき。實泰公この事を聞きて満足に思はれ太政大臣たるべ

一七六
●先賢は、むかしの賢人。先哲。●内外の文は、内典外典内典は佛經、外典は佛經以外の書籍。●章段は、一文章の大小段落、又、一文章の大小なるきれめさ、その大いなるきれめの内の一小句きりこ。

○第八十三段 竹林院入道左大臣殿

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にাগり給はんに何のどごこほりかおはせんなれども、「珍しげなし、一上にてやみなん」とて、出家し給ひにけり洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月満ちては缺け、物盛にしては衰ふ。よろ

づのこと、さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。

註解 竹林院は、西園寺公衡公。●さごこほりは、さはり、故障。●一上は、左大臣の異稱。●洞院は、實泰公。●甘心は心よく思ふこと。まんぞく。●相國の望は、太政大臣たらんこの希望。●亢龍の悔は、易の「亢龍有悔、盈不可久」の句に基づく。天上に登りつめたる龍の後悔の義。人若し貴尊を極むれば敗亡の悔あり、戒慎すべしこの義。●やぶれに云は、破滅にのぞめる道理この義。

○第八十四段 法顯三藏の天竺にわたりて

法顯三藏の天竺にわたりて、故郷の扇を見ては悲み、病に臥しては、漢の食を願ひ給ひけることを

●第八十四段

法顯三藏が印度國へゆき古里の、扇子を見てなげき病氣に

希望あらせられざりき。世に亢龍の悔と云ふ事あり、月も満つれば虧け、物事の盛れば衰ふ。何事も前途のつまれば、破滅に近き道理なり。

かかりては支那の食物を希望されしを打ち聞き「遠き印度へ渡る程の人物が、ひごく心弱きさまを、他國の人に見せられしものかな」と或人言ひしに、弘融僧都「やさしくも人情ふかき三藏なるかな」と言はれたる事、世棄てし法師にも似ず、奥床しき言葉と思ひたり。

一七八
聞きて、「さばかりの人の、むげにこそ、心よわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ」と、人のいひしに、弘融僧都、「優になさけありける三藏かな」と、いひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくくおぼえしか。

註解 注顯は、姓は龔、平陽の人。晋の安帝の頃、印度に赴きたる僧。三藏とは、三は經・律・論の三つを稱し、藏は、一切の文義又は教理をこゝにたさむる義、轉じて、佛教に精通せる人との義。●天竺は、印度の古稱。●漢は、もろこし。支那、即ち法顯の故郷。●むげに、非常に。あまりにさ云ふ程の意。●優に云は、やさしい人情のある。●心にくく云は、世すてし法師にも似ず、奥床しき言葉と思ひしきなり。

●第八十五段

人の心は天性のままに正直ならぬ故、偽りなしも限らずしかし自然に正直なる人、どうして無さし云はるべき。自分ば正直ならざれば、人の賢を見て羨ましく思ふは世の常情なり。至愚の人ば之をにくみ、大利益を得べく、小利を取らず、外面を虚飾して名譽を賣らんさす、是れ賢人の心の中なりと云ふ。自分の心と違ふによりて、この悪口を爲すにても知らるる。是等の

○第八十五段

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されど、おのづから、正直の人、なごかなからむ。おのれ、すなほならねど、人の賢を見て羨むは、世の常なり。至りておろかなる人は、たましく、賢なる人を見て、これをにくむ、「大きな利を得んが爲に、少しきの利を受けず、偽りかざりて名を立てんとす」とぞ知る。おのれが心に違へるによりて、この嘲りをなすにて知りぬ。この人は下愚の性、うつるべからず。偽りて、小利をも辭すべからず。かりにも、愚を學ぶべからず。狂人

は下愚の性、賢きものにはな
りがたし。そして、偽りて小
利を辭する事をえせず。假初
にても愚者をまねべからず
狂人のまねして大道を走らば
其人狂人、悪人のまねして人
を殺さば悪人なり。良馬のま
ねするは良馬の類、舜のまね
するは舜の輩なり、うそにて
もよき故、賢者のまねする者
は賢人としてよし。

●第八十六段

惟繼中納言は詞藻に富みし人

士なり。一心に佛道を修め、
三井寺の圓位僧正と同宿され
しに、文保年間三井寺が延暦
寺の爲に焼かれし時僧正にあ
ひ、「御坊を寺法師と云ひた
れど、寺は焼けし故今日より
法師と申すべし」と言はれた
り。面白きからかひなり。

のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。悪人
のまねとて、人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥
のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を
學ばんを、賢といふべし。

註解 下愚の性は、極めておろかなる生れつき。論語にも「上
智與下愚」と見ゆ。●うつるべからずは、かしこきものに
はなれぬとの義。●驥は、千里の馬。轉じて、才能ある人。
●舜は、支那古代の聖天子。●學ぶは、見習ふと云ふ程の意
べしは、斷定の意を表はす語。

○第八十六段 惟繼中納言は

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精

進して、讀經うちして、寺法師の圓位僧正と同宿
して侍りけるに、文保に、三井寺焼かれし時、坊
主にあひて、「御坊をば、寺法師とこそ申しつれ
ど、寺はなければ、今よりは、法師とこそ申さめ
ど、いはれけり。いみじき秀句なりけり。

註解 惟繼中納言は、文章博士たりし。惟繼。葛原親王の後裔
●風月の才は、詩歌など風雅なる道の才能。●精進は、精神
をこめて餘念をまじへず、行を修めて退轉せざること。●一心
に道を修むること。●文保は、年號の名、花園天皇の御宇。
●三井寺は、長等山園城寺の別稱にして、天台宗寺門派の本
山、近江國大津市の西北に在り。寺法師は、三井寺の法師の
義。●觀山の山法師の對。寺の焼かれしは、文保元年四月廿五

日、叡山の僧徒の爲になり。●秀句は、たくみに言ひかけたる文句。面白いしやれ。からかひ。諧謔。

●第八十七段
下劣の者に酒のまする時分は注意すべき事なり、宇治に住む男、京なる具覺坊と云ふ風流なる遁世の僧がその小舅に當りし故、つれづれ親しく交際したり。一日、迎ひさして馬をやれり。具覺坊は「遠方なり、馬の口取男に一杯飲ませよ」と酒出しけるが、受けに受けぐひぐひ飲みたり、太

○第八十七段 下部に酒飲ますることは下部に酒飲まする時は、心すべきことなり。宇治に住みける男、京に、具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけりある時、迎に馬をつかはしたりければ、「遙なる程なり、口つき男に、まづ一度せさせよ」とて、酒を出したれば、さし受け、さし受け、よよど飲みぬ。太刀うちばきて、かひぐしければ、頼母しくおぼえて、召し具して行くほごに、木幡の臣

刀はきし故、強く思ひ、木幡までゆきしが、奈良法師の武士つれたるに會へり。口取男「日暮れし山中にうろんなり止まれ」と聲かけ、太刀ぬきて斬りかかれ、先方の人々も之に應じたり。具覺坊はもみ手して謝しければ、寺法師等はおのゝ嘲笑して去りぬ口取男は具覺坊に向ひ「残念なる事致されたり。自分は酔ひ居らず、手柄せんとするをこの抜きし太刀むだに歸せしめ給ひしよな」と怒りて具覺

にて、奈良法師の、兵士あまた具して逢ひたるにこの男立ち向ひて、「日くれたる山中に、怪しきぞ、とまり候へ」と、いひて、太刀を引き抜きければ、人も、みな、太刀ぬき、矢はげなごしけるを、具覺坊、手をすりて、「うつし心なく酔ひたる者に候ふ。まげて許し給はらん」と、いひければ、おのゝ、あざけりて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊は、口惜しき事し給ひしものかな。おのれ、酔ひたること侍らず。高名仕らんとするを、抜ける太刀、空しくなし給ひつること」と、怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて、

坊を馬より斬り落し山賊く
き大聲にて呼びし故、村人來
て見れば「われこそ山賊なり」
と言ひて走り斬りまはるを、
多人數にて打ちすみて捕へけ
り。馬は血にそみ、宇治の家
さして歸りたり。驚きて召使
の下男どもかけつけさせたる
が、具覺坊は梶子原にうめき
臥したるを捜し出し、かつき
て歸れり。辛うじて生命を取
留めたるも、腰をきりそこ
なはれて不具となりたり。

山だちありと、ののしりければ、里人、起りて出
であへば、「われこそ山だちよ」と、いひて、走
りかかりつつ、切り廻りけるを、あまたして、手
おはせ、うち臥せて、縛りけり。馬は、血つきて
宇治大路の家に走り入りたり。淺ましくて、男ど
もあまた走らかしたれば、具覺坊は、梶子原に
よび臥したるをもどめ出でて、かきもて來つ。か
らき命生きたれど、腰、切り損せられて、かたは
になりにけり。

註解 下部は、賤しき者。げれつもの者又。しもべ。●心ず。氣
をつく。注意す。●なまめき云云は、風流なる事に世を遁れ

し僧。●申し睦びは、平生親しく交際すること。●遙なる程
なりは、遠路ゆゑの義。●口つき男は、馬の口取り。●よよ
さは、ぐいぐい。●木幡は、山城國宇治郡宇治村の大字。
●奈良法師は、大和奈良の僧侶。當時奈良の五大寺叡山など
には、自ら武器をも執り、且つ武士をも抱へたり。●矢はげ
は、矢を弓弦にあてがふこと。●手をすりは、もみですること。
●謝罪する時の所作。●うつし心は、ほんしん。たしかな
る心。●高名は、てがら。●ひたは、むやみ。めつた。●山
だちは、山賊。●ののしりければ、大聲に呼びし故。●
手おはせは、手きすをつけ。●宇治大路の家は「宇治に住み
ける男」の宅。●によびは、うなること。うめき。●からき
云々は、ヤツと命は取留めはしたものの。